女子新國文

改制新版

卷九

31759
Ma7
資料室

42387

教科書文庫

4
810
42-1938
200030
1503

文部省檢定濟
昭和十三年一月十七日　高等女學校、實業學校國語科用

文學博士　芳賀矢一　編
東京帝國大學教授
文學博士　橋本進吉　訂補

女子新國文

改制新版

東京　合資會社　冨山房發兌

資料室
375.9
H47

清少納言　小堀鞆音筆

廣島大學圖書之印

廣島大学教図
40287

女子新國文　改制新版　卷九

目次

一　春は曙……清少納言……二
一　四季……二
二　降るものは……三
三　雲は……三
四　あてなるもの……三
五　木の花は……四
六　香爐峯……六

二　春秋の爭……津田左右吉…六
三　東洋の詩興……夏目漱石…一四
四　後白河院五十の御賀……荒木田麗女…二一
五　花はさかりに……吉田兼好…二八
　　文學と「もののあはれ」(自修文)……本間久雄…三五
六　大原御幸……(平家物語)…四三
七　平家雜感……高山林次郎…五〇
八　石彫獅子の賦(詩)……薄田泣菫…五七
九　新島守……(增鏡)…六三
一〇　日本民族の獨創力……田中寬一…七三
一一　我が國各時代の代表的婦人……八一

一二　滋野井子別れ……近松門左衞門…八八
一三　源信僧都の母……(今昔物語)…九七
一四　母の完成……下田次郎…一〇三
　　幼兒の生活と童謠(自修文)……白鳥省吾…一〇九
一五　落花の雪……(太平記)…一一五
一六　關の夕風(古歌)……一二〇
一七　銀の猫……上田秋成…一二三
一八　光賴卿の參內……(平治物語)…一三〇
一九　永遠の生命……亘理章三郎…一三八
二〇　國土と愛國心……姉崎正治…一四三

女子新國文

改制新版　卷九

不盡山を望む歌　　山部赤人

天地の　わかれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　富士の高嶺を　天の原　ふりさけ見れば　わたる日の　影もかくろひ　照る月の　光も見えず　白雲も　い行きはゞかり　時じくぞ　雪はふりける　語りつぎ　いひつぎ行かん　富士の高嶺は　（萬葉集）

清少納言
平安時代中期の文學者、歌人。清原元輔の女。第六十六代一條天皇の皇后定子に仕へた。生歿年不詳。

紫だちたる雲の細くたなびきたる。

山の端いと近くなりたるに。

一　春は曙

清少納言

一　四季

春は曙。やう〳〵白くなりゆく。山ぎは少しあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月の頃はさらなり。闇もなほ螢飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。

秋は夕暮。夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風の音、蟲のねなどいとあはれなり。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたるもいとつきづきし。晝になりてぬるくゆるびもてゆけば、すびつ、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

…火も白き灰がちになりぬるはわろし

二　降るものは

雪。霰。みぞれはにくけれど、雪の眞白にてまじりたる、をかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたる程、またいと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黑う、眞白に見えたる、いとをかし。時雨、霰は板屋、霜も板屋、庭。

三　雲は

白き。紫。黑き雲あはれなり。風吹くをりの雨雲。明けはなるゝ程の黑き雲の、やう〳〵白うなりゆくもいとをかし。

月のいとあかきおもてに、薄き雲いとあはれなり。

四　あてなるもの

水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪の降りたる。いみじう美しき兒の

黑き雲のやう白うなりゆくもいとをかし

帝國圖書館藏

しなひ　長く　色よく　咲きたる　いと　めでたし

祭　賀茂祭。

紫野　京都市の北部。大德寺邊の舊名。

橘の　濃く　青きに　花の　いと　白く　咲きたるに　雨の　降りたる

いちごくひたる。

五　木の花は

梅、濃くも淡くも紅梅。櫻の花びら多きに、葉色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる。いとめでたし。卯の花は品おとりて何となけれど、咲く頃のをかしう、ほと、ぎすの蔭にかくるらんと思ふにいとをかし。祭のかへさに紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などにいと白う咲きたるこそをかしけれ。青色の上に白き單がさねかづきたるやうにて、いとをかし。

四月の晦、五月の朔などのころほひ、橘の濃く青きに、花のいと白く咲きたるに、雨の降りたるつとめてなどは、世になく心あるさまにをかし。花の中より實の黃金の玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、朝露にぬれたる櫻にもおとらず、ほと、ぎすのよすがとさへ思へばにや、なほさらにいふべきにもあらず。

をかしき　にほひ　こそ　心もとなく　つきためれ

桐の　花　紫に　咲きたるは　なほ　をかしきを

よの　常に　いふ　べくやはある

あふち（楝）

梨の花よにすさまじくあやしきものにして、目に近く、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顏など見ては、たとひにいふも、げにその色よりして愛なく見ゆるを、もろこしに限りなきものにて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ心もとなくつきためれ。さてはなほいみじうめでたき事はたぐひあらじと覺えたり。

桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごりざまうたてあれど、また他木どもと、ひとしういふべきにあらず。もろこしにことぐ、しき名附きたる鳥の、これにしも栖むらん、心ことなり。まして琴に作りてさまぐ、なる音の出で來るなど、をかしとはよの常にいふべくやはある、いみじうこそはめでたけれ。

木のさまぞにくげなれど、あふちの花いとをかし。枯ればなにさまことに咲きて、必ず五月五日にあふもをかし。

小納言よ云々　皇后定子の御言葉。
香爐峯　支那の江西省九江縣廬山の北の一峯。
歌などにさへ云々　白居易の詩の句「香爐峯の雪は簾を撥げて看る。」
思ひこそ寄らざりつれ。

津田左右吉　歴史學者。文學博士。早稲田大學教授。明治六年岐阜縣に生れた。

六　香爐峯

雪いとたかく降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、すびつに火おこして物語などして集りさむらふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん。」とおほせられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷きあげたれば、笑はせ給ふ。人々も皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそ寄らざりつれ「なほこの宮の人には、さるべきなめり。」といふ。

（枕草子）

二　春秋の爭

津田左右吉

自然界は、平安時代の人にとつては、人世の歡樂を助けるものとしてのみ價値があつたのである。換言すれば、彼等は自然界を以て人の翫弄すべきものと考へてゐた。奈良時代の人は、單純な小兒らしい態度で自然の美しい色と聲とを愛し、或は自然を我が氣分に

驅使しようとする

狹隘で優美で且小規模である平安京の山水

融合させたのであつた。然るに平安時代の貴族にとつては、花も鳥も彼等に翫弄される爲に咲きもし、鳴きもしなければならぬのであつた。だから、花も月も人の見る爲のものときめて置いて、花を散らす風には吹くなと命じ、月を隱す雲には去れよといひ、傲慢な態度で自然を驅使しようとする。さて翫弄されるものは小さいもの、美しいものである。現に「何も〳〵小さきものはいと美し。」（枕草子）、「つくしきもの」といつてゐる。雄大魁偉、森嚴、凡そその威力の人を壓し、その活動の人を恐れさせるものは、固より翫弄すべきものでない。自然界に於て優美な羸弱な方面のみを愛するといふ事は、奈良時代の人から既にさうであつたが、平安時代になると、貴族等の氣風が益〻羸弱になると共に、それが一層甚だしくなつたばかりでなく、かういふ特殊な理由も加つてゐる。

特に狹隘で、優美で、且小規模である平安京の山水を天地として、

それより外には出る事を好まなかつた當時の都人士は、山川の遊覽を興あるものとした奈良時代の人とは違つて、平素見馴れてゐる小さい美しい自然界と少しでも樣子の變つた光景に接すると、殆どその前に戰慄するばかりであつた。枕草子開卷第一に「春は曙」と書出した一節を見るがよい。すべてが小さく美しく優しいではないか。「怖しきもの」に「つるばみの笠。やけたる所。みづぶき。菱。髮多かる男の頭洗ひてほすほど。栗のいが。」のみを擧げたのを見ると、怖しいものさへ小さいものばかりであるのに驚かれる。古今和歌集以下の撰集を見ても、家集を讀んでも、その題材となつてゐるのは、花鳥の色と音とでなければ、美しい月の影、優しい蟲の聲々である。萬葉に見える程の山水の眺も、殆どなくなつてしまつた。その歌が春秋に多くして夏冬に少いのも、美しく優しい眺が春秋に多いからである。（和泉式部に「世の中は春と秋とになしはてて夏と冬とのな

世の中は云々　和泉式部集卷二。

階の下云々　源氏物語賢木の卷。

雪高う云々　枕草子「君達は」の章。

野分でさへも……　凄じいより寧ろ美しい

からましかば」といふ歌がある。）夏ならば「階の下薔薇けしきばかり咲きて、春秋の花盛りよりも、しめやかにをかしき」（源氏）眺か、冬ならば「雪高う降りて今もなほ降るに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが……紫の指貫も雪にはえて、濃さまさりたるを著て、あこめの紅ならずば、おどろ〳〵しき山吹を出して、からかさをさしたる」（枕草子）美しさをのみ賞した。野分でさへも、源氏の野分の卷や枕の「野分のまたの日こそ」の一節を見ると、凄じいより寧ろ美しい。平安時代の人は、何ものに就いても、優美な點をのみ見出してゐる。

こゝに春秋の爭といふ事がある。これは萬葉から既に見えてゐる事で、かの額田王の歌には秋を選んでゐる。平安時代になつては、伊勢物語に

雁なきて菊の花さく秋はあれど
はるの海べにすみよしの濱

の歌があるが、選擇の主意が明らかに說いてない。貫之は

春秋に思ひ亂れてわきかねつ
ときにつけつゝうつる心は

と、どちらにも都合のよい事を言つてゐる。承香殿のとし子の

おほかたの秋に心をよせしかど
花見るときはいづれともなし

もほゞ同樣で、一應は秋に心を寄せたといふものの、その理由が明らかでない。たゞよみ人知らずの

春はたゞ花のひとへにさくばかり
ものゝあはれは秋ぞまされる

に至つて、「もののあはれ」の一轉語を下して秋に旗を擧げた。あはれといふからには、春よりも秋に人の心が動かされることが深いといふのであらうが、それは何故であらうか。源氏の薄雲の卷にその

春秋に云々　拾遺集卷九雜の部。

おほかたの云々　拾遺集卷九雜の部。

春はたゞ云々　拾遺集卷九雜の部。

侍りにしがな

御覽ぜさせんと思ひ給ふ

主人公が、

歳のうち、行きかはる時々の花紅葉、空の景色につけても、心のゆく事も侍りにしがな。春の花の林、秋の林の盛りを、昔よりとりどりに人爭ひ侍りける。その頃のげにと心よるばかりあらはなる定めこそ侍らざるなれ、唐にも春の花の錦に如くものなしといひ侍るめり。やまと言の葉には、秋のあはれを取立てて思へる、いづれも時々につけて見給ふに、目移りて、えこそ花鳥の色をも音をも辨へ侍らね。狹き垣根のうちなりとも、そのをり〳〵の心見知るばかり春の花の木をも植ゑわたし、秋の草をも掘移して、徒なる野邊の蟲をも住ませて、人に御覽ぜさせんと思ひ給ふ。

といつた語がある。これにも春秋をいづれとも判斷してゐないが、「秋のあはれ」の成語を引いてゐるのに、秋草の色と蟲の音とを考へてゐる事を注意しなければならぬ。春を飾る花鳥の色と音とに對

して、秋の特殊な情趣を示すこの風物が、「もののあはれ」を一入深く感じさせるものだとすれば、かの歌に、春より秋を選んだのは、爛漫たる櫻の花の華やかなよりは、寧ろ萩やをみなへしのひたすらに優しく、小さく、女らしい弱々しさのあるのに、心が引かれたのであらう。春の花の一重に咲くばかりとして、それよりも秋を取つたのだから、千草の花の種々なのが、一層美しい故とも解せられるが、その千草の色には、春の花に求められない優しさと弱々しさとがあるのである。さうして、此所に平安時代の人の嗜好が現れてゐるのではなからうか。同じく秋を取つても、華やかな紅葉を手折らうとする額田王とは、理由の違ふ所が看取される。

さて美しい小さい眺を愛する自然の傾向として、觀察は頗る細かくなつた。桃の木の若枝の多くさし出たのを「片方は青く、いま片枝は濃く艶にて、蘇枋（すはう）のやうに見えたる。」（枕草子）といひ、「入りはてぬ

入りはてぬる

山際に光のなほとまりて明う見ゆるに

これ等は……ものとは違つて……來たものである

る山際に、光のなほとまりて明う見ゆるに、薄黄ばみたる雲のたなびきたる。」（同上）といひ、「明けはなるゝほどの黑き雲の、やう〳〵白うなりゆく。」（同上）といふなどの色の觀察、または「おほとなぶらはまゐらで、長すびつにいと多くおこしたる火の光に、御几帳の紐のいと艶やかに見え、御簾の帽額のあげたる鈎のきはやかなるも、けざやかに見ゆ。」（同上）といひ、有明の月のありつゝもとうちいひて、さしのぞきたる髪のかしらにもより來ず、五寸ばかりさがりて、火ともしたるやうなる月の光。」（同上）といふ光線の描寫などの精緻な筆つきを見るがよい。細かい點をいふと、蚊の羽風さへ清女の筆にのぼつてゐる。これ等は宇津保に「朝の霞、綠の衣なり。夕べの雲、黄なる錦なり。」（春日詣）などとある漢文直譯流のものとは違つて、深切な實際の觀察から來たものである。源氏の風景の描寫は枕ほど纖細ではないが、その代りいかにも生きてゐる。よくその風韻を寫し、全體とし

夏目漱石　小說家。名は金之助。東京市の人。大正五年歿、年五十。

住みにくさが高ずると、引越したくなる

ての情趣を髣髴せしめる手腕は、また格別であるといつてよいた。ただ清少納言は紫式部のやうに人情の微を穿つ眼がなかつただけ、目に見えるものの觀察は甚だ鋭敏である。それはこの女一個人の特長ではあるものの、やはり時代の生んだものである事はいふまでもない。

（文學に現れたる國民思想の研究）

三　東洋の詩興

夏目漱石

山路を登りながらかう考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。

住みにくさが高ずると、心安い所へ引越したくなる。何所へ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れ、畫が出來る。

越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれ程か

寛げて（クワロ）寛ぐ

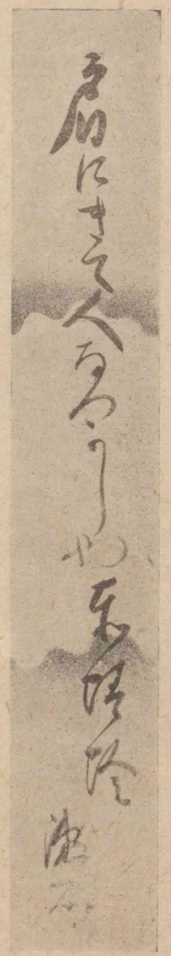
天職が出來、使命が下る

肩にきて人なつかしや赤蜻蛉　漱石

鏗鏘の音は胸裏に起り、絢爛は心眼に映る

寛げて束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出來、こゝに畫家といふ使命が下る。あらゆる藝術の士は人の世を長閑にし、人の心を豐かにするが故に尊い。

住みにくい世から住みにくい煩を引拔いて、ありがたい世界をまのあたりに寫すのが詩である。畫である。或は音樂、彫刻である。細



漱石筆蹟

かに言へば、寫さないでも、たゞまのあたりに見れば、其所に詩も生き、歌も湧く。著想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起り、丹青を畫架に向つて塗抹せずとも、五彩の絢爛はおのづから心眼に映る。たゞおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清く麗かに收め得れば足りる。この故に無聲の詩人には

一句なく…尺縑なくとも…幸福である

觀じ得る點に於て解脫し得る點に於て掃蕩し得る點に於て

幸福である

一句なく、無色の畫家には尺縑なくとも、かく人生を觀じ得る點に於て、かく煩惱を解脫し得る點に於て、かく清淨界に出入し得る點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得る點に於て、あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

忽ち足の下で雲雀の聲がしだした。谷を見おろしたが、何所で鳴いてゐるか影も形も見えぬ。たゞ聲だけが明らかに聞える。せつせとせはしく、絶間なく鳴いてゐる。方幾里の空氣が一面に蚤に刺されて、ゐたゝまらないやうな氣がする。あの鳥の鳴く音には瞬時の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし、鳴きあかし、また鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。その上何所までも登つて行く。何時までも登つて行く。雲雀はきつと雲の上で死ぬに相違ない。登り詰めた擧句は、流れて雲に入つて漂うてゐるうちに、影は消えてなくなつて、たゞ聲だけが空のうちに殘るのかも知れない。

魂の在所が判然する

シェリー　イギリスの詩人。（西紀一七九二―一八二二年）

雲雀の詩　雲雀に寄する賦。

春は眠くなる。猫は鼠を捕る事を忘れ、人間は借金のある事を忘れる。時には自分の魂の居所さへ忘れて、正體がなくなる。たゞ菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に魂の在所が判然する。雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない。魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲に現れたもののうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。

忽ちシェリーの雲雀の詩を思ひ出して、口の中で覺えたところだけ諳誦してみたが、覺えてゐるところは二三句しかなかつた。

前を見ては、しりへを見ては、ものほしとあこがるゝかな、われ。腹からの笑と言へど、苦しみのそこにあるべし。美しき極みの歌に、悲しさの極みの想、籠るとぞ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀のやうに思ひきつて、前後を忘卻して、一心不亂に我が喜を歌ふわけにはゆくまい。

かう山の中に來て自然の景物に接すれば見るものも聞くものも面白い

氣にもならねば料簡も起らぬ

西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく萬斛の愁などといふ辭がある。詩人に憂は附物かも知れないが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦もない。菜の花を見ても、たゞ嬉しくて胸が躍るばかりだ。かう山の中に來て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦しみも起らぬ。

陶淵明（橋本雅邦筆）

苦しみのないのはなぜであらう。たゞこの景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は地面をもらつて開拓する氣にもならねば、鐵道を架けて一儲する料簡も起らぬ。たゞこの景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからでもならぬ景色が、景色としてのみ余が心を樂しませるから、苦勞も

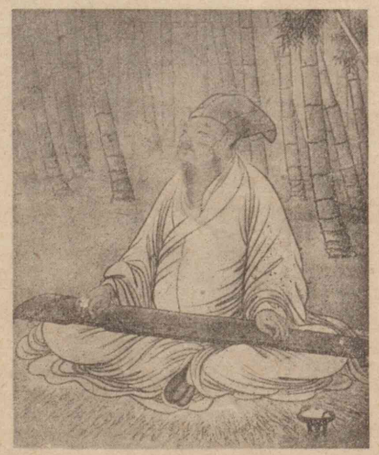
醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である

余の欲する詩はそんな……のではない

どこまでも世間を出る事の出來ぬのがその特色である

心配も伴なはぬのであらう。自然の力はこゝに於てか尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしめるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騷いだり、泣いたりするのは、人の世に附物だ。余の欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞するやうなものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない。理非を絶した小說は少からう。どこまでも世間を出る事の出來ぬのがその特色である。殊に西洋の詩になると、人事が根本になるから、いはゆる詩歌の純粹なものも、この境を解脫する



王維（寺崎廣業筆）

菊を東籬の下に云々　晉の處士陶淵明の詩。陶淵明集卷三の飲酒二十首中の詩句。

獨り幽篁の裏に云々　唐の詩人王維の詩句。

事を知らぬ嬉しい事に、東洋の詩歌には、そこを解脱したのがある。

菊を東籬の下に採り、
悠然として南山を見る。

たゞそれぎりのうちに、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出て來る。超然と出世間的に利害損得の汗を流し去つた心持になれる。

獨り幽篁の裏に坐し、
琴を彈じて復長嘯す。
深林人知らず、
明月來つて相照す。

たゞこれだけのうちに、優に別乾坤を建立してゐるのである。

（草枕）

荒木田麗女　江戸時代中期の歴史家。伊勢の人。文化三年（二四六六年）歿、年七十五。

院　後白河天皇。明けん年安元二年（一八三六年）。

内　高倉天皇。

隆季　藤原氏。

まだきより　とりどりに　舞ども　習ひ給ふめり

月さへいとゞ　澄みまされるは

四　後白河院五十の御賀

荒木田麗女

院の上、明けん年五十にたらせ給ふとて、内には御年滿の事思しまうけさせ給ひ、秋の頃中宮大夫なる隆季の大納言に仰事ありて、上卿仕うまつり給ひ、行幸所はじめられ、道々の工ども召して、御調度何くれの用意仕うまつるべくおきて給ひ、舞人などをも殊に選ばせ給ふとて、さりぬべき家の子の君達に、かねて仰言下りしかば、まだきよりとりく〳〵に舞ども習ひ給ふめり。神無月にも、なほこの御賀の定めとて、人々召されて、たゆまぬ御いそぎなりし。

所々にはものの音もひまなく、笛竹のよな〳〵木枯に吹合せたる聲は、空にすみのぼり、琴の調べは獨り秀でたる松に響き通ひて、とゞこほりなき聲にきほひて、月さへいとゞ澄みまされるは、よの常にすさまじき影など言ふべくもあらず。都の内はいつとても時

臨時特別手当

3月、4月分

60円00 × 2 = 120円00

所得税 21円60

現金支給高

98円40

40

河野先生

受驗票

番號	紹介者	受驗者

月　日午前　時迄ニ本票携行
出廠アリタシ

注意—辨當、鉛筆携行ノコト

廣島陸軍被服支廠

今年は安元元年。

いつしかと　おぼいたるに

舞　御覽すべく御けしきありて

中宮　高倉天皇の中宮平徳子。

維盛　平維盛。重盛の子。一門と共に西國に走つたが、遁れて紀伊に至り、高野山で僧になつたといふ、時に年二十五。

めかしう、冬のけはひのもの寂しさも知られねど、今年はとりわけ、かやうの御いそぎに、今めかしうて過ぎつゝ、春になりては、またさまことに、梅の匂、鶯の鳴く音にも、人々心うきたちて、いつしかとおぼいたるに、睦月二十日餘り、院の上うち〳〵舞御覽ずべく御けしきありて、舞人、樂人、法住寺殿に參れり。皆布衣をぞ著たる。

御賀は彌生と定めさせ給ひ、如月二十一日、閑院の内裏にて試樂あり。中宮も物見にまうのぼらせ給ふ。童舞は胡飲酒、陵王なり。柳櫻をこきまぜたる裝束は、をりにあひていとはえ〳〵しう、殿上にも地下にも、ものの上手多かる比にて、いとゞおもしろく、若き君達とりどりに舞し給ふ。いづれも御よそひなどの清らは更にも言はず、容、よういすぐれたる限りえらせ給へば、殊にめでたう、一人劣り給へるもなく見え給ふに、權の亮維盛のおくれて立出で給ふる青海波の姿はしも、更に立並ぶ人なく、なまめかしうて、はかなくうち振

光源氏　源氏物語の主人公。容貌赫くばかり美しかつたので光源氏といふ。

宮　中宮。

近き御ゆかり　即ち中宮と維盛とは伯母、甥の御關係にあられるのである。

雅行　源氏。

定房　源氏。

宗家　藤原氏。

陵王は宗家の中納言の御子なめれど　これは祿を賜はり給はずやありけん

る袖の匂さへ世の常ならず珍しげなるを、若き女房たちかたはら痛きまでめでまどひつゝ、「光源氏のいみじかりしためしも、かくこそは」など聞えあへるに、宮も涙ぐましうせさせ給へり。近き御ゆかりなるを、思し召さるゝがあはれなるにぞ、人より殊に御目もとまらせ給へるなるべし。また小舍人雅行の君、童姿美しうて、胡飲酒舞ひ給へるを、上﨟たち御覽じて、殊にほめさせ給ひ御衣かづけさせ給ふ。父の定房の大納言立ち給ひ、賜はりつる祿を肩にかけて、廣廂にてけしきばかり舞ひ給へる、言ひしらずめづらしう、末の代の例にもしつべうもてはやし聞え給ひ、上も御けしきよくて、いみじう思し召されたり。陵王は宗家の中納言の御子なめれど、これは祿を賜はり給はずやありけん。

御年滿の日は彌生四日なれば、花の盛りは過ぎつれど、おほかたもものおもしろきをりにて、木隱れには風にしられぬ遲櫻もな

人々は……思ひ給へしかど

女院　後白河天皇の皇后平滋子。即ち高倉天皇の御母、建春門院。

ほ残りあり。鳥の聲、霞の色もなべてならず、空の緑さへいとゞはえばえしきに、行幸の御よそひも、殊に引きつくろはせ給ひ、仕うまつる殿ばらも、とり〴〵に好みとゝのへられたる、御装束のうるはしさは、世に珍しきまでなり。人々は試樂の日のめでたかりしに、事盡きぬと思ひ給へしかど、今日はまた殊更なり。舞の君達は、高麗、唐土の綾錦を裁重ね、世になき匂を盡して、色も艶もおぼろげならんはあいなしと、おの〴〵もの狂はしきまで、いどみかはし給ひしもしるく、さま〴〵のきよらは、いづれか劣り勝るけぢめあらん。たゞひとつものにて、日影さへ霞みもあへず、けちえんにもてはやされて、輝かしきさまなり。大臣たち、上達部、皆御前の簀子につき給ふ。中宮も行啓ありしかば、女院も殊に御心づかひせさせ給ふめり。御かたがたの女房、童のなり姿など、うるはしうとゝのへさせ給ひ、いろいろの衣どものこぼれ出でたる几帳のほころびは、なほ梅の匂を残

うつろふ影もうらゝにて飛交ふ蝶も……かよひ囀る鶯も……添ふるにや

若き君達……漕ぎ巡らし給ふ

右の大殿　藤原兼實。
内の大臣　藤原師長。

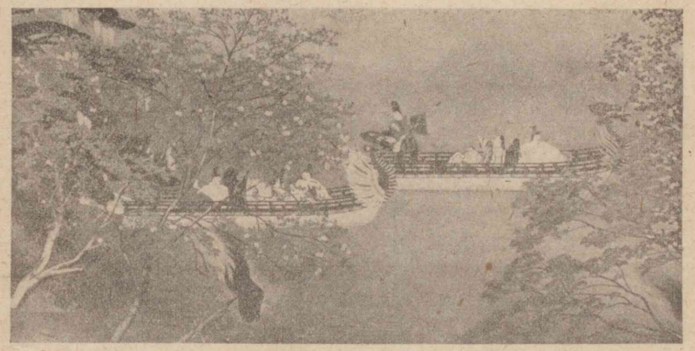
すばかり懐かしき薫に、御簾の追風さへ、なまめかしういとえんなりかし。

時なりて樂人参る。隈もなく晴れたる庭に、うつろふ影もうらゝにて、飛交ふ蝶も舞の姿にかよひ、囀る鶯もものの音を添ふるにやと覺えて、うち吹く風も春おもしろき聲に聞きわたされたり。もの見る女房たちは、心も置所なげにて、永き日さへあかず、程なきやうにて、夕風になりゆく空も口惜しげなり。

またの日も上なほおはしませば、人々昨日にかはらず参り給ふ。女院、中宮の女房たちに、若き君達うち交り給ひ、池の方なる舟に乘り漕ぎ巡らし給ふ。とり〴〵にものの音出して遊びたる、いとおもしろし。また鞠をも御覽ずとて、その方に堪へたる君達おり立ちて仕うまつり給ふ。これはた珍しう、内も院も興ぜさせ給ふ。夜に入りては御前の御遊び始りて、右の大殿、内の大臣、琵琶弾き給へり。箏、笛

筆笛などをも：：仕うまつり給ひ

吹きとほさせ給へるいみじさに院の上聞し召さる



龍頭鷁首の船（田村彩天筆）

などをも、殿ばらとり〳〵に仕うまつり給ひ、唱歌の人々、御階に參れり。昨日のおどろおどろしかりしにひきかへ、けぢかう懐かしく、殊に心も澄みまさる夜のさまなり。

翌日六日は御賀の後宴とて、樂人、殿上人も地下人も皆、龍頭鷁首に乘りて、最勝光院の廊の方より御前に出づる程、池のさゞ波も庭の松風もひとつにきほへる絲竹の調べは、たゞ千年の聲とのみ聞きわたされたり。今日は上も御笛吹かせ給ふ。殊更にめでたう世になき音の限り吹きとほさせ給へるいみじさに院の上、御

さこそおもしろきも侍りぬべけれど

さはりなくて遂げさせ給へれば内にもうれしう思し召さるべし

目おしのごひつゝ聞し召さる。御前なる人々もおとなしきは涙落して、たぐひなう思ひ奉れり。かやうの事の紛れにや、歌などは語り傳ふる人も侍らず。いみじき歌人多きをりなれば、さこそおもしろきも侍りぬべけれど、口惜しう人聞き置き侍らずなん。事果てぬれば、人々に賞行はせ給ひ、上も還御の儀になる。御贈物人々のかづけもの、御心殊に思しおきてて、華族も下萬も、ほど〳〵にめでたうせさせ給へり。去年よりこと〳〵しき世のひゞきなりしを、さはりなくて遂げさせ給へれば、内にも御胸あきて、うれしう思し召さるべし。かういづこも御心ゆくさまにて過させ給へば、千代を經るとも、あく世あるまじき御代なりと、殿ばらもこよなうおぼいたり。

（月のゆく〳〵）

吉田兼好　鎌倉時代末期の歌人、文學者、京都の人。（一二〇〇年）歿、年六十九。

たれこめて云々　「たれこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻もうつろひにけり」（古今集、藤原因香）

花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ

五　花はさかりに

吉田　兼好

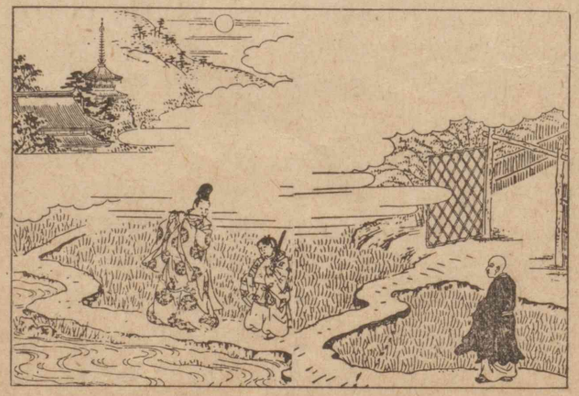
花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向ひて月をこひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情深し。咲きぬべき程の梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散りすぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り、月の傾くを慕ふ習はさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり今は見どころなし」などはいふめる。

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待出でたるがいと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲がくれの程、またなくあはれなり。しひ柴、白がしなどのぬれたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて心あらん友もがなと都こひしう覺ゆれ。

いと若き男の笛をえならず吹きすさびたる

○

あやしの竹のあみ戸のうちよりいと若き男の、月かげに色合さだかならねど、つやゝかなる狩衣に濃き指貫、いと故づきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙かなる田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつゝ分行く程、笛をえならず吹きすさびたる、あはれと聞知るべき人もあらじと思ふに、行かん方知らまほしくて、見送りつゝ行けば、笛を吹きやみて、山のき



あやしの竹の編戸のうちより（草然徒本繪）

しぢに立てたる車

能をつかんとする人…さし出でたらんこそいと心にくからめ

はに總門のあるうちに入りぬ。しぢに立てたる車の見ゆるも、常よりは目とまるこゝちして、下人に問へば、しか〳〵の富のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにやといふ。御堂の方に法師ども參りたり。夜寒の風に誘はれ來るそら薫物の匂も身にしむこゝちす。寢殿より御堂の廊に通ふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。心のまゝに繁れる野らは、置き餘る露に埋もれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどかなり。都の空よりは雲の行き來も早きこゝちして、月の晴れ曇る事定めがたし。

○

能をつかんとする人、よくせざらん程は、なまじひに人に知られじ、うち〳〵よく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめと常にいふめれど、かくいふ人、一藝も習ひ得る事なし。未だ堅固かたほなるより上手の中にまじりて、そしり笑はるゝにも恥ぢず、つれなくすきて嗜む人…年を送れば…なびき名を得る事なり

あはれ我が道ならましかばかくよそに見侍らじものを

いひてありなん

れなくすきて嗜む人、天性その骨なけれども、道になづまず、みだりにせずして年を送れば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位に至り、德たけ、人にゆるされて、ならびなき名を得る事なり。天の下のものの上手といへども、初は不堪の聞えもあり、むげの瑕瑾もありき。されども、その人道のおきて正しく、これを重くしてはうらつせざれば、世の博士にて萬人の師となる事、諸道かはるべからず。

○

一道にたづさはる人、あらぬ道のむしろにのぞみて、「あはれ我が道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」と言ひ、心にも思へること、常の事なれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨ましく覺えば、「あな羨まし。などか習はざりけん」といひてありなん。

我が智を取出でて人に爭ふは、角あるものの角をかたぶけ、牙あるものの牙をかみ出すたぐひなり。人としては善に誇らず、ものと

人に　まされりと思へる　人は：いはねども

長じぬる　人

用ありて　行きたりとも　その事はてなば　とく歸るべし

その由を　もいひてん

爭はざるを德とす。他にまさる事のあるは大いなる失なり。しなの高さにても、才藝のすぐれたるにても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそいはねども、內心にそこばくのとがあり。愼みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くはたゞこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、自ら明らかにその非を知る故に、志常に滿たずしてつひにものに誇る事なし。

○

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬ事なり。用ありて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。久しくゐたる、いとむづかし。人と向ひたれば詞おほく、身もくたびれ、心も靜かならず、よろづの事さはりて、時をうつす。互のため益なし。いとはしげにいはんもわろし。心づきなき事あらんをりは、なか〳〵その由をもいひてん。同じ心に向はまほしく思はん人の、つれ〳〵にて、「今しばし、今日は心靜かに」などいはんは、この限りにはあらざるべし。

阮籍晉の詩人。竹林七賢の一。阮籍は氣に入つた友が來れば青眼を見せ、氣に入らぬ友が來れば白眼を見せたといふ。

久しく　聞えさせねば

わづらはしかりつる　事は　安かるべき　事

不定と　心得ぬるのみ　まことにて　たがはず

阮籍が青き眼なこ、誰もあるべき事なり。その事となきに人の來りて、のどかに物語りぬる、いとよし。また文も、「久しく聞えさせねば」などばかりいひおこせたる、いとうれし。

○

今日はその事をなさんと思へど、あらぬいそぎまづ出で來てまぎれ暮し、待つ人はさはりありてたのめぬ人は來り、賴みたるかたの事はたがひて、思ひ寄らぬ道ばかりはかなひぬ。わづらはしかりつる事は事なくて、安かるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年の事もかくの如し。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし、皆たがひゆくかと思ふに、おのづからたがはぬ事もあれば、いよ〳〵ものは定めがたし。不定と心得ぬ

るのみ、まことにてたがはず。

○

よろづの事は賴むべからず。愚かなる人は深くものを賴む故に、うらみ怒る事あり。勢ありとて賴むべからず、こはきものまづ滅ぶ。財多しとて賴むべからず、時の間に失ひやすし。ざえありとて賴むべからず、孔子も時に遇はず。德ありとて賴むべからず、顏回も不幸なりき。君の寵をも賴むべからず、誅をうくる事すみやかなり。奴したがへりとて賴むべからず、そむき走る事あり。人の志をも賴むべからず、必ず變ず。約をも賴むべからず、信ある事すくなし。身をも人をも賴まざれば、是なる時は喜び、非なる時はうらみず。左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくだく。心を用ふる事少しきにしてきびしき時は、ものにさかひ爭ひてやぶる。寬くしてやはらかなる時は、一毛も損ぜず。人は天地の靈なり。天地は限るところなし。人の性何ぞことならん。寬大にしてきはまらざる時は、喜怒これにさはらずして、もののためにわづらはず。

（徒然草）

顏回　孔子の高弟。字は淵。魯の人。

奴したがへりとて賴むべからず

身をも人をも賴まざれば……うらみず

自修文

文學と「もののあはれ」

本間久雄

吾々は何の爲に文學を學ぶか。

これは極めて平凡な問ではあるが、これに對する答を十分に吟味し考察する事は、極めて重大な事である。と言ふのは、その答こそは、現代の文化的教養の問題と深い關係をもつてゐるからである。

美學者ヘーゲルは言つてゐる、「藝術の目的は、吾々の感覺や情緒の中に、これまで人間の心に存在してゐた一切の事をもたらすにある。藝術は實に『人生の事、他人事として看過すべきもの一

本間久雄　英文學者、評論家。文學博士。早稻田大學教授。明治十九年米澤市に生れた。

ヘーゲル　ドイツの有名な哲學者。（西紀一七七〇―一八三一年）

としてあるなし。』といふ古來の格言を實現すべきである。」と、まことに至言である。文學の目的もまた蓋しこれに外ならないのである。

文學は廣い意味に於て、あらゆる人の心の記述である。ありとある生活相の描寫である。時と所とを超越して、廣大無邊な人生そのものを、常に吾等の前に現示するのが文學である。この意味に於ては、詩人マシュウ・アーノルドの言つたやうに、文學は實に「一種偉大な言葉」であると言へる。

吾々の生活は、改めて言ふまでもなく、常に限定されてゐる。吾吾はそのおのがじしの職業に隨つて、それに關係のある生活を見てゐるだけだからである。その他の世界に就いては殆ど知るところがない。とりわけ分業といふ事の確立して來た近代の社會に於ては一層さうである。人生を全體的に眺めたり味はつたりする事は、實際生活に於ては殆どあり得ない事である。かくし

アーノルド　イギリスの批評家、詩人。（西紀一八二二―一八八八年）

てまた、その限定された範圍内に於て人生に接するだけであるから、他人に對する同情心とか、社會に對する認識とかいふやうなものもまた、おのづから限定されて來る。隨つてその人の生活意識は往々にして偏狹であり、その人の内生活もまた貧弱である事を免れない。蓋し文學こそはそれを救ふ唯一のものである。

さてそれならば、何によつて、或は、どういふ力をもつてゐる事によつて、文學はさういふ效果を擧げ得るのであるか。それは外でもない。文學はいはゆる「もののあはれ」を吾々に知らせるからである。

尤も「もののあはれ」といふ言葉は、それを用ひる人により、また同じ人であつても用ひる場合によつて、それ〴〵異なつた意味を含んでゐる。例へば、徒然草の作者が「あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙たち去らでのみ住みはつるならひならば、いかにもののあはれもなからん。」と言つてゐる時と、同じ作者が、人間は

内生活　物質的な生活に對して精神的な生活をいふ。

あだし野　京都市右京區嵯峨の奥、昔の墓地。

鳥部山　鳥邊山とも書く。今京都市五條坂邊六道の東南。古來の火葬場。

力點　重きをおくところ。
滋味　うまみ。あぢはひ。
肯綮に中る　要點を得てゐる。

あらゆる動物のうちで、一番長生をするものであるに拘らず、何時までも長生をしたいといふ慾心の盛んなのは困つたものだといふ事を書いた後に、「ひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなんあさましき」と言つてゐる時とでは、同じ「もののあはれ」でも、意味は聊か異なつてゐる。前のは悲しみとか哀傷とかいふ意味の方に力點が附せられてあり、後者のはもつと複雜で、人生の滋味とでも言ふべきものと同義語になつてゐる。

それはとにかく、文學と「もののあはれ」との關係に就いては、國學者本居宣長の說くところが、最も肯綮に中つてゐる。

宣長は「物語」卽ち小說の價値を說いて、この物語は「世の中にありとあるよき事、あしき事、めづらしき事、をかしき事、おもしろき事、あはれなる事などのさま〳〵」を書きあらはして、それを讀む人に「世の中のあるやうをも心得て、もののあはれを知るものな

り」と言つてゐる。卽ち、善い事でも、惡い事でも、珍奇な事でも、をかしい事でも、哀れな事でも、何によらず一切の事を書示し、かくして世の中の有樣、世の中の相、世の中のありのまゝの狀態を感じさせ、味ははせて、そして、「もののあはれ」を知らせるのが、小說――推弘めて文學だといふのである。さて次に「もののあはれ」を知るといふ事は、宣長に從へば、「何事にまれ、感ずべき事に當りて感ずべきこゝろを知りて感ずる」事である。この感ずべき事に當つても心が動かず、感ずる事のないのは、もののあはれを知らない「心なき人」である。凡そもののわきまへ心のある人は、感ずべき事に當つては、おのづから感ぜずにはをられないわけであるが、さうでないのは、結局感ずべき心がないからである。これはまさに「岩木のたぐひ」で、憐れむべき人である。

宣長は上のやうに言つてゐるが、これを別な言葉で言へば、「もののあはれ」を知るといふ事は、吾々のもつてゐる感受性を、生き

見解　考へかた。見かた。
ペーター（西紀一八三九―一八九四年）
換を一にする　やりかた、行きかたを同じくする。

生きと鋭敏に活かせて、その對象からの印象を心ゆくばかり、殘る隈なく受容れる事である。かくして吾々は、生活から滲み出る滋味を會得し、延いて人生そのものの味はひに徹し得るのである。

序ながら、これと似た見解を把持してゐる者に、近代英國の卓越した批評家ウォルター・ペーターがある。彼は藝術の力が、常にそれに接するものの「感受性」を潑剌たらしめ、美に對する吾々の鑑賞心を刺戟し、それを豐潤ならしめ、その結果、吾々をして人生そのものに味到せしめる所以を說いてゐる。ペーターのいはゆる「感受性」は、取りも直さず宣長の「もののあはれ」である。一は宣長により一はペーターによつて、東西揆を一にして同じやうな學說の唱へられたのは、比較文學論上の興味ある一奇觀である。

さて再び繰返して言ふが、文學によつて「もののあはれ」を知るといふ事は、世の中のあるやう、卽ち世の中のさまざまな相や、複雜な人間關係を、たゞに表面的でなく、底の底まで立入つて深く味はふ事を意味するのである。換言すれば、全圓的な、または全關的な人生味、または全體としての人生の味はひを感得する事である。そしてかゝる味はひを味ははせるところに、文學の文學たる所以があるのである。

導因　導かれた原因。

隨つて文學を味はつてゐる人――文學を味はふ事によつて「もののあはれ」を知り、人生そのものに味到してゐる人と、さうでない人とでは表面の生活は同じやうに見えても、その內生活には非常な相違がある。

前者の同情心が豐かで、廣く且深いのに比して、後者のそれは貧しく狹く且淺い。前者の認識が的確で且寬宏であるに比して、後者のそれは偏狹固陋である。例へば、此所に極惡無道の人間があると假定する。前者はそれを憎む前に、その由つて來るところ、卽ち何故にその人間が惡人になつたかといふ導因や徑路を考

へてその人間をまづ憐れまうとするに比して、後者はひたすらにその人間を憎み憤るといふ違である。そして、かういふ人生に對する見方や態度の相違は、やがてまた、その人の人格そのものの上に大きな相違をもたらさずには措かない。卽ち、豐かで廣く深く、且高い人格は、文學によつて「もののあはれ」を知り、延いて人生に味到する事によつて、始めてかち得られるのである。そしてまた、かういふ人格をかち得る事が、やがて現代文化人の重要な條件の一つである事は、改めて言ふまでもない。現代の文化的教養上、文學の重要視さるべき所以もまたこゝにある。

後白河法皇　第七十七代の天皇。文治二年（第八十二代後鳥羽天皇の御代。一八四六年）

建禮門院　第八十代高倉天皇の中宮、安德天皇の御母。名は德子。平清盛の女。平家の滅後、大原に隱栖された。建保元年（一八七三年）崩、御年五十七。

六　大原御幸

後白河法皇は文治二年の春の頃、建禮門院の大原の閑居の御すまひ御覽ぜまほしう思し召されけれども、如月、彌生の程は嵐はげしう、餘寒も未だ盡きず、峯の白雪消えやらで、谷のつらゝもうち解けず。かくて春過ぎ夏立ちて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて、大原の奥へ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々には後德大寺、花山の院、土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少少さぶらひけり。

遠山にかゝる白雲は、散りにし花の形見なり。青葉に見ゆる梢には、春の名殘ぞ惜しまるゝ。頃は卯月二十日餘りの事なれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふに、初めたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絕えたる程も、思し召し知られてあはれな

花山の院　大納言兼雅。土御門卿　權中納言源通親。

遠山にかゝる云云　「まがふとて眺ひし峯の白雲は散りてぞ花のかたみなりける」（續後撰集、後久我太政大臣）

初めたる御幸なれば御覽じ馴れたる方もなく

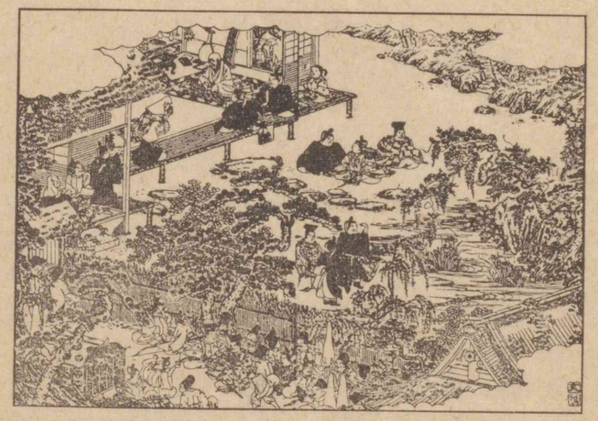
寂光院

寂光院　大原村字草生にある。天台宗。

錦を晒すかとあやまたる

青葉まじりの云云　「夏山の青葉まじりの遅櫻初花よりもめづらしきかな」（金葉集、藤原盛房）

り。



大原御幸（源平盛衰記圖會）

西の山の麓に一宇の御堂あり、即ち寂光院これなり。舊う造りなせる泉水、木立、よしあるさまの所なり「いらか破れては霧不斷の香を燒き、樞落ちては月常住の燈をかゝぐ」とは、かやうの所をや申すべき。庭の若草茂り合ひ、青柳絲を亂りつゝ、池の浮草波に漂ひ、錦を晒すかとあやまたる中島の松に懸れる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲の絶間より、山ほとゝぎすのひと聲も、君の御幸を待ち顔な

落來る水の音さへゆゑび

瓢簞屢〻空し云々　和漢朗詠集にある。原憲孔子の弟子。字は子思。

もる月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり

り。法皇これを叡覽あつて、かうぞあそばされける、

池水にみぎはの櫻ちりしきて
なみの花こそさかりなりけれ

舊りにける巖の絶間より落來る水の音さへゆゑび、よしある所なり。綠蘿の垣、翠黛の山、繪にかくとも筆も及びがたし。

さて女院の御庵室を叡覽あるに、軒にはつた、朝顔はひかゝりし、しのぶまじりの忘草、瓢簞屢〻空し、草顔淵が巷に滋く、藜藿深く鎖せり、雨原憲が樞を濕すとも言ひつべし。杉の葺きめもまばらにて、時雨も霜も置く露も、もる月影に爭ひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ、世に立たぬ身の習とて、憂き節しげき竹柱、都の方の音づれは、間遠に結へるませ垣や、わづかにことゝふものとては、峯に木傳ふ猿の聲、賤が爪木の斧の音、これ等が音づれならでは、まさきのかづら、青つゞら、來る人稀なる所な

この上の山へ花摘に入らせ給ひて候

なじかは　惜しませ給ひ候べき

り。

法皇「人やある、〳〵。」と召されけれども、御いらへ申す者もなし。稍あつて、老い衰へたる尼一人參りたり「女院はいづくへ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「この上の山へ花摘に入らせ給ひて候。」と申す。「さこそ世を厭ふ御習とは言ひながら、さやうの事に仕へ奉るべき人もなきにや、御いたはしうこそ。」と仰せければ、この尼申しけるは、「五戒、十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽ぜられ候にこそ。捨身の行（ぎやう）になじかは御身を惜しませ給ひ候べき。」とぞ申しける。

この尼の有樣を御覽ずれば、身には絹、布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。あの有樣にても、かやうの事申す不思議さよと思し召して、「抑〻汝はいかなる者ぞ。」と仰せければ、この尼さめざめと泣いて、しばしは御返事にも及ばず。稍あつて涙を抑へて、「申

信西藤原通憲。鳥羽崇德近衛の三天皇に仕へた。平治の亂に信賴等に殺された。

申す者にて候なり

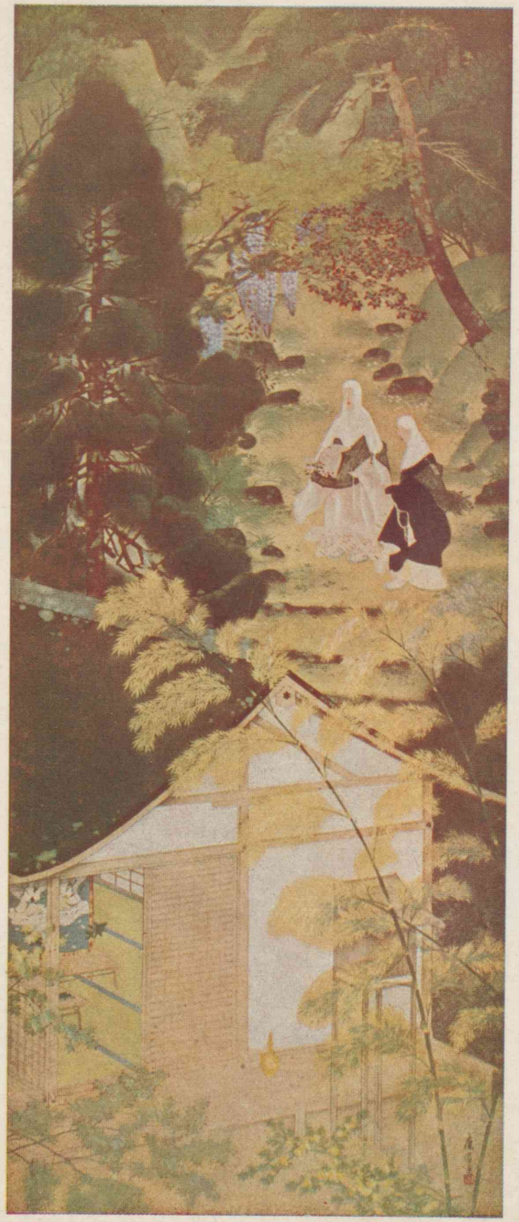
身の衰へぬる程思ひ知られて今更せん方なうこそ候へ

不思議の事申す尼かなと思ひたればことわりにて申しけり

すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申す者にて候なり。母は紀伊二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけても、身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそ候へ。」とて、袖を顏に押しあてて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇「げにも汝は阿波の內侍にこそあんなれ。御覽じ忘れさせ給ふぞかし。何事につけても、たゞ夢とのみこそ思し召せ。」とて、御涙せきあへさせ給はねば、供奉の公卿、殿上人も、「不思議の事申す尼かなと思ひたれば、ことわりにて申しけり。」とぞ、各感じあはれける。

さて彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつつ、外面の小田も水越えて、しぎたつひまも見えわかず。さて女院の御庵室へ入らせおはしまし、障子を引きあけて叡覽あるに、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲を懸けられた

來迎の三尊　彌陀、觀音、勢至の三尊。



手向の花

岩田正己筆

普賢　文殊と共に釋迦佛に侍する菩薩。
善導和尚　支那唐代の名僧。
先帝　安德天皇。
公卿殿上人も…皆袖をぞ絞られける　供奉の

鳥飼維實　藤原維實。（また伊實に作る）伊通の子。永暦元年（一一八二〇年）歿、年三十五。
五條大納言　藤原盛國の子。
典侍局　平重衡の妻。

り。左に普賢の繪像、右に善導和尚並びに先帝の御影を懸けられたり。蘭奢の匂に引きかへて、香の煙ぞ立ちのぼる。さて傍を叡覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に麻の御衣、紙のふすまなんど懸けられたり。さしも本朝漢土のたへなるたぐひ數を盡し、綾羅錦繡の裝も、さながら夢にぞなりにける。法皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も、まのあたり見奉りし事ども今のやうに覺えて、皆袖をぞ絞られける。

稍あつて、上の山より濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩のかけぢを傳ひつゝ、おりわづらひたるさまなりけり。法皇「あれはいかなるものぞ」と仰せければ、老尼涙を抑へて、「花がたみ臂にかけ、岩つゝじ取具して持たせ給ひて候は、女院にてわたらせ給ひ候。爪木にわらび折りそへて持ちたるは、鳥飼中納言維實が女、五條大納言國綱の養子、先帝の御乳母大納言典侍局（ナけのつぼね）」と申しもあへず泣きにけり。法

見えまゐらせんず　恥らん　かしづき　消えよ　も　失せばや

菱るゝに繁くして絞りやかねさせ給ひけん

花がたみをば賜はりけり。

皇御涙を流させ給へば、供奉の公卿、殿上人も、皆袖をぞぬらされける。

女院は世を厭ふ御習と言ひながら、今かゝる有様を見えまゐらせんずらん恥づかしさよ。消えも失せばやと思し召せどもかひぞなき。宵々ごとの閼伽の水、掬ぶ袂も菱るゝに、曉起の袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へもかへらせ給はず、また御庵室へも入らせおはしまさず、あきれて立たせましましたるところに、内侍の尼參りつゝ、花がたみをば賜はりけり。世を厭ふ御習、何か苦しう候べき。はや〳〵御見參あつて、還御なしまゐらせ給ひ候へ。と申されければ、女院御涙を抑へて、御庵室に入らせおはします。一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の樞には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思の外の御幸かなとて、御見參ありけり。

（平家物語）

高山林次郎　明治時代の評論家。文學博士。樗牛と號した。山形縣の人。明治三十五年（一九〇二年）歿、年三十二。

嵐の吹きすさばんず　あした

一題の遺詠に云云　平忠度が都落に際し、藤原俊成を訪うて遺詠を託したこと。恩愛にほだされて云々　平維盛が妻子の恩愛にひかれ、屋島から都へ引返したこと。

七　平家雜感

高山林次郎

世にもあはれは平家とぞ言ふめる。まことにこの一門の盛衰を考ふれば、心も言葉もなか〳〵に及ばざりけり。

按ずれば、一旦の榮華に耽りて百年の計を思はず、秋や嵐の吹きすさばんずあした、なほ春の夜の夢朧にして、醒めての後は行手をばさすがに浮世と觀じても、先世、後代既に棧をかへたるをいかにすべき。今を昔に還さん術も片絲の、よりくづれたる世こそかへすがへすも是非なけれ。

されば此所に風雅にかくれては、一題の遺詠に今生の本懷を終へ、彼所に恩愛にほだされては、三世の現在に來世の果報を思はず、あはれは桐の一葉に散初めて、世は永への秋とぞ見えにける。想へば、奇しきまでにあはれなりける運命かな。

史は多かれど平家の都落ばかりあらじ　あらじ　限りなるはあらじ

墨股の勝闘　岐阜縣安八郡にある墨股川（長良川）で、養和元年（一一八一年）源行家等が平家の軍と戰つて敗れたのをいふ。

いざさらば　巳みなん　歸り來べき　また都としも思はねばにや　一炬の煙となし果てぬるこそあわたゞしかりしか

凡そ人國の傳へ遺しゝ史は多かれど、平家の都落ばかりあはれの極みにもまた目覺しき限りなるはあらじ。

平城の餘燼未ださめず、墨股の勝闘なほ響きぬるに、信越俄に雲亂れて、木曾の五萬騎はや比叡の前後に充ち滿ちぬ。宇治、淀の備脆くも潰えて、都も今を限りとぞ見えし。ござんなれ、一門の天下身を置くに所なく、この世のうきにみ吉野の、山のあなたに隱家もなきか。いざさらば已みなん、都の中にていかにもならんよりは、西國の行幸に一旦の凌辱を忍ばせ給はんや。生死もわかぬ別路に人のあはれの限りもなし。また歸り來べき都としも思はねばにや、六波羅、池殿、西八條以下一門譜第の邸宅、宿房、京、白川の四五萬家を併せて、一炬の煙となし果てぬるこそあわたゞしかりしか。

こゝに鳳闕の礎空しく殘り、椒房の嵐夜々悲しむ。保元この方、天

昔のさまの夢に入るをばいかにせん

あゝこの時この人想ひ果して如何

池殿　池の大納言。平頼盛。清盛の異母弟。文治二年（一八四六年）歿、年五十五。

下の榮華を盡したる花の都の故郷を、燒野の原と顧みて、末も煙の波路をば、行方も知らずさすらふらん。直衣、束帶の身にも今は黑金の衣をのべけれども、誰かは詠歎の餘哀になれて弓矢の譽を勵むべき。さても捨てがたき命や。今こそは世にも人にも憂かりけれ。さすがに忍ばるゝ昔のさまの夢に入るをばいかにせん。翠華搖々として西に向へば、秋風到る所野に充てり。あゝ、昨日は東關のもとに轡を並べし十萬餘騎、今日は西海の波に纜を解きて七千餘人、行手の空はわかねども、身にしむ秋は欺かれず、渚に寄する波の音、袂に宿る月の影、いづれか心を傷ましめざるべき。月の出るさの山の端を、あなたの空とや思しけん、日暮舷に笛吹く人あり、響は遠く煙波を掠めて、三軍等しく耳を聳つ。あゝ、この時、この人、想ひ果して如何。

古へより亂離の世には反覆の人あるを免れず、安きを求め、危きを避くるは、已みがたき人の情なればなり。さもさうず、一の池殿の大納言が、舊恩を頼みとして兵衞佐が芳心を望みしを外にして、平家の一門は上は大臣、納言より、下は衞府、諸司の掾に至るまで、ともどもに沒落の運命を同じうせしこそゆゝしけれ。

且は重代の芳恩にこたへなんず。

高山林次郎

想へば積善の餘慶既に家に盡き、積惡の餘殃早く身に及べり。もとより頼もしからぬ行末かけて、何をか望み、何をか願はんやたゞ十善の帝王、三種の神器を帶して今ぞ一門の末路に立たせ給ふ。いでやいかならん野の末、海の果までも行幸の御供申し、先世の契をふみ、且は重代の芳恩にこたへなんず。あはれ、故入道大相國、淨蓮大禪門も照覽あれ、世は是非ならうも武運の末とこそ覺ゆれど、名門の最後はかくてこそあるべけれ。

何ものの美かよくこれにたぐふべき

平家は……動かざりしはゆゝしくもまたあはれの極みなりき

げに名門の最後はかくてこそあるべけれ。凡そ邦家の滅亡、必ずしも麗はしからず、たゞ平家の沒落に至りては、何ものの美かよくこれにたぐふべき。

平家はさすがに名門の事とて、沒落の際まで大義名分を執りて動かざりしは、ゆゝしくもまたあはれの極みなりき。

木曾は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。強ひて院宣乞ひ受けければ、孤軍もとより勝算なし。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐討つべきよしを言送りぬ。平家の答はかくなりき。

よしや世は季になりぬとも、木曾なんどに語らはれて、いかでか都に上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこなたにわたらせ給ふ。須く甲を脱ぎ、弦をはづし、來りて軍門に降るべし。さらば東國征討の御供にも加へらるべきか。

平家……頽勢を廻らさんとだに思はゞ乘ずべき時こそ機會なりけれ

本三位中將重衡。清盛の第五子。一の谷に捕へられ、平家滅亡後（壽永四年）木津川で斬られた、年二十九。

通盛教盛の子。壽永三年（一八四四年）一の谷に戰死。

と。あゝ、何ぞその言辭の堂々として亡落の輩にたぐはざるや。平家人に乏しきも、一時の權變を弄びて頽勢を廻らさんとだに思はゞ、かゝる時こそ乘ずべき機會なりけれ。さるを名分の正しきを執りて、成敗の數を顧みず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は則ち迂ならんも、かくして滅びんは垢を含みて存らへんよりも、いかばかり麗しかるべき。

本三位の中將、一の谷に捕はれけるを、院宣屋島に下りて、三種の神器都に上せよ、重衡を放ち還さんとぞ傳へける。平家の請文こそまことに壯大並びなかりしか。いはく、

院宣謹みて承り畢んぬ。通盛の卿以下一の谷にて誅せられける者、その數少からず、何ぞ重衡一人の宥恕を喜ばんや。三種の神器は正統の天子一日も御身を離し給ふべきに非ず。抑我が君は故高倉院の讓を受けさせ給ひてよりこゝに四年、東夷北狄の禍に

天に二日なく國に二君なし。還幸なからんには神器などか都に還るべき

一門の武運こゝに盡きなば：：罷りなん。

宗盛　清盛の次子。壽永四年（一八四五年）壇の浦に敗れ、捕へられて近江篠原に斬られた、年三十九。

遇ひて、暫く西國に行幸あるのみ。天に二日なく國に二君なし。還幸なからんに於ては、神器などか都に還るべき。抑〻賴朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められしところなり。然るに忽にしてこの鴻恩を忘れて、妄りに干戈を弄ぶ。やがては神罰その身に返るべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思し召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきなり。一門の武運こゝに盡きなば、鬼界、高麗、天竺、震旦の果までも罷りなん。悲しいかな、人皇八十一代が間傳承誤なかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは。宗盛頓首謹みて申す。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも成敗の爲にその名節を枉ぐる事をなさゞりき。あはれ、平家の世ざかりはまことに大いなりしが、その沒落の更に大いなるには及ばざりき。麗しきかな平家、かくして滅びたりとて何の恨むるところぞ。

（樗牛全集）

薄田泣菫　詩人、隨筆作家。名は淳介。明治十年岡山縣に生れた。

八　石彫獅子の賦

薄田泣菫

一

童子に問へば石工は、
入りて小暗き仕事場に、
圓き頸をかきなでて、
朽木の棚にすゑられて、
豕、狗兒、野の狐、
こは目ざましき誇かな、

木かげに夢を結びぬと。
刻みさしつる唐獅子の
誰ぞ、もの思ふは、ひそやかに。
顏くすぼるゝあら彫の
さてはを鹿のむらがりに、
日かげにぬるゝ獅子の影。

裂けたる岩に爪かけて、　雄々し、いかるかその姿、
たてがみ長く背にまきて、　見れば湧きよる春の潮。
胸はゆたかに力男が、　ひきしぼりたる弓のごと。

忿怒現ずる明王の　ひろき肩より燃えあがる
焔か、ながき尾は躍り、　にこ毛密なるあなうらは、
いざよひ薔薇の花ふむも、　巣くへる鳥は目ざむまじ。

心がまへのいみじさや、　瞳子彫られぬ唐獅子は、
光を知らぬ盲目の身、　鼻かぐはしき香を嗅ぐも、
いまだ前脚ふみあげて、　花野の路はしだかじな。

鑿の手またく捨てられて、　御苑の夏のあけぼのや、

綠したゝる木のかげに、　巨人の如く立たんとき、
雄姿いかに、背に伏して、　しばし想像にふけらまし。

二

汝の王者かたどられ　眞白き石に刻まれぬ。
野より、山より、林より、　つどへよ獸、列なりて
蹄の前にひざまづき、　弱きを恥ぢて僕たれ。

おほき靈魂くだり來て、　眞白き石に包まれぬ。
野より、山より、林より、　つどへよ獸、列なりて
その光輝にぬれぬべく、　蹄の前にひれふせよ。

無上の權威あらはれて、　眞白き石に具せられぬ。
野より、山より、林より、　つどへよ獸、列なりて

かもしか（羚羊）

王にさゝぐる燔祭の　聖き火盡を整へよ。
斑の牛とかもしかは、　ふかき痛手に甘んじて、
焔のうちに身を投げよ。　誇るべきかな、犧牲の
高きほまれは汝にあり、　羨む群ぞおろかなる。

見よ犧牲はそなはりぬ、　獅子は額にたてがみの
ながき流をふるはせて、　あな起ちあがる、「戰鬪と
勝と力の權化なり、　伏せよ」と呼べば皆伏しぬ。

さかんなるかな、その言葉、「神は死ぬめりとことはに、
人は魔のごと强からず、　われは王者ぞ萬有の
値の源ぞ、わづらひと　もだえの胸のあるじなり。

あゝ運命の眩きをも、　眼ひらきてながめ入り、
胸わなゝかぬ雄心の　若き勇氣に溢れたる、
勝利のおもひに漲れる、　この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、　われは汝の伴なり」と、
聲はらつばの音に似たり。　時に默止はやぶられて、
たかき讃美と服從は、　雷のどよみに現れぬ。

三

いま想像の羽たゆむ。　見れば唐獅子日を浴びて、
ふくよかにまた靜かなる　すがたいかなる誇ぞや。

石彫ながく傳はりて、　榮とならんは幾千歳。

四月二十日　承久三年（一八八一年）。
帝　第八十四代順德天皇。
春宮　第八十五代仲恭天皇。
御兄の院　土御門天皇。
父帝　後鳥羽天皇。
家實　近衛基通の子。
道家　後京極良經の子。左大臣。
あづまの若君　當時の將軍頼經。鎌倉にゐた。
院　後鳥羽天皇。
ひがしざま　鎌倉幕府方。
その心づかひすべかめり

あゝ藝術は支配せよ、　とはの生命ぞ汝にある。

（泣菫詩集）

九　新島守

四月二十日帝おりさせ給ひ、春宮四つにならせ給ふに讓り申させ給ふ近頃皆この御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならんかし。同じき二十三日院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父帝をば本院とぞ聞えさする。この程は家實のおとゞ關白にておはしつれど、御讓位の時道家のおとゞ攝政になり給ふ。かのあづまの若君の御父なり。

さても院の思し構ふる事、忍ぶとすれどやう〳〵もれ聞えて、ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官にて伊賀の判官光季といふ者あり、かつ〳〵彼を御勘事の由仰せらるれば、御

さるべくて　身の失すべき時に
こそあなれと　思ふものから　討手の攻來りなん時に
我が身　北條義時。

人に見えなんには　うしろを親の顏また見るべからず
されば死を　横ざまのせん事は　あるべからず

方に參るつはものども押寄せたるに、遁るべきやうなくて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思し召しける。

あづまにもいみじうあわてさわぐ。さるべくて身の失すべき時にこそあなれと思ふものから、討手の攻來りなん時に、はかなきさまにて屍を曝さじ、おほやけと聞ゆとも、親らし給ふ事ならねば、且は我が身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人を頭として、雲霞のつはものをたなびかせて、都にのぼす。泰時を前に据ゑて言ふやう、「おのれをこのたび都に參らするは思ふところ多し。ほいの如く清き死をすべし。人にうしろを見えなんには、親の顏また見るべからず。今を限りと思へ。賤しけれども義時、君の御爲にうしろめたき心やはある。されば横ざまの死をせん事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、二たびこの足柄、箱根は越ゆべし。」など泣く〳〵言ひきかす。まこと

軍のあるべきやう。

まゐりあへら。

軍兵を賜はせば

にしかなり。また親の顔拜まん事もいと危しと思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。かたみに今や限とあはれに心細げなり。

かくてうち出でぬるまたの日、思ひがけぬ程に、泰時たゞ一人鞭をあげて馳來たり。父胸うちさわぎて、「いかに。」と問ふに、「軍のあるべきやう、大方のおきてなどは、仰の如くその心を得侍りぬ。若し路のほとりにも、はからざるにかたじけなく鳳輦を先立てて、御旗を揚げられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんにまゐりあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。このひと事をたづね申さんとて、一人馳歸り侍りき。」と言ふ。義時とばかりうち案じて、「賢くも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引く事はいかゞあらん。さばかりの時は冑を脱ぎ、弓の弦を切りてひとへにかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで君は都におはしましながら、軍兵を賜はせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戰ふべし。」と言ひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

公經　藤原氏。西園寺家の祖。

うまごの事　將軍頼經のこと。頼經は公經の女の出である。

故大將　頼朝をいふ。

七條院　藤原殖子。後鳥羽天皇の御母。

修明門院　藤原重子。順德天皇の御母。

中院は……かやうの御さわぎにも殊に交らせ給はざめり。

都にも思しまうけつる事なれば、ものゝふども召集へ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將一人のみなん、御うまごの事もさる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さしいらべもせず、院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ〳〵數多聞ゆれど、さのみは記しがたし。いくさにまじり立つ人々、この外の上達部にも殿上人にも數多ありき。

中院はあかで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に交

いかなる龍馬もうち渡しがたければ…惱めり

泰時と時房と亂れ入りぬれば

らせ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづいくさの事などもおきて仰せられけり。

何時の年よりも五月雨晴間なくて、富士川、天龍などえも言はずみなぎりさわぎて、いかなる龍馬もうち渡しがたければ、攻めのぼる武者どもも怪しく惱めり。かゝれども終に都に近づく由聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘騎とかや、宇治、勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山に逃げこもり、遠き世界に落下り、すべて安げなくさわぎ滿ちたり。いかゞあらんと君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月二十日餘りにや、いくばくの戰だになくて、終に御方のいくさ破れぬ。荒磯に高潮などのさし來るやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、言はん方なくあきれて、上下たゞものにぞ當り惑ふ。

おはします　ぺければ

鳥羽殿　京都市の南方鳥羽にあった離宮。城南離宮とも言った。

ものにもがなや「とりかへすものにもがなや世の中をありしながらのわが身と思はん」（源氏物語河海抄）

信實　藤原信實。有名な畫家。文永二年（一九二五年）歿、年八十七といふ。

あづまより言ひおこするまゝに、かの二人の大將軍謀らひおきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院、宮々、所々に思し惑ふ事さらなり。本院は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ網代車の怪しげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日を限りの御ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらん、まだいと惜しかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御舟に奉りて、遙かなる波路を凌ぎおはします。御心地、この世の同じ御身とも思されず、いみじういかなりける代々の報にかと恨めし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。まことや七月九日みかどをもおろし奉りき。この四月かとよ、御讓位ととめで

200
150
180
530

四十五日とかや云々　秦の第三世子嬰のこと。始皇の孫。四十六日で沛公に降り秦は亡びた。

この事に觸れにしたぐひは　幡多　高知縣幡多郡。

若宮　第八十八代後嵯峨天皇。

承明門院　土御門天皇の御母在子。

通宗のむすめ　源通子。

たかりしに、夢のやうなり。七十餘日にており給へるためしも、これや初なるらん。「唐土にぞ四十五日とかや位におはするためしありける。」とぞ、唐の文讀みし人の言ひし心地する。それもかやうの亂やありけん。さて上達部、殿上人、それより下、はた殘りなくこの事に觸れにしたぐひは、重く、輕く罪に當るさま、いみじげなり。

中院は初より知ろしめさぬ事なれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙かに遷らせ給ひぬるに、のどかにて都にあらん事、いと恐ありと思されて、御心もてその年閏十月十日、土佐國の幡多（はた）といふ所に渡らせ給ひぬ。去年の二月ばかりにや、若宮出で來給へり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとゞめ奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下臈一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いと怪しき御手輿にて下らせ給ふ。

後には云々　貞應二年（一八八三年）五月。

父の王を失ふ云云　「劫初以來、諸惡王あり、國位を貪る故にその父を殺すこと一萬八千人。」（觀無量壽經）

來し方行く先も見えず。

おほやけともなるべききざみのたがひめに世に隔りて　少しの

途すがら雪かきくらし、風吹荒れ、吹雪して、來し方行く先も見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

憂世には、かゝれとてこそうまれけめ
　　ことわり知らぬわがなみだかな

「せめて近き程に。」とあづまより奏したりければ、後には阿波國に遷らせ給ひにき。

さてもこのたび世の有樣、げにいとうたて口惜しきわざなり。あるは「父の王を失ふためしだに一萬八千人までありけり。」とこそ佛も說き給ひためれ。まして世下りて後、唐土にも日の本にも、國を爭ひて戰をなす事數へ盡すべからず。それも皆一ふし二ふしのよせはありけん。若しはすぢ異なる大臣、さらでもおほやけともなるべききざみの少しのたがひめに世に隔りて、その恨の末などより事起るなりけり。今のやうにむげの民と爭ひて君の亡び給へるため

承平　第六十一代朱雀天皇の御代。（一一五九―一一五九七年）
天慶　朱雀天皇の御代。（一一五九八―一一六〇六年）
康和　第七十三代堀河天皇の御代。（一一七五九―一一七六三年）
義親　源義親。
故院　後白河天皇。
二條院　第七十八代二條天皇。
王城の徒に亡ぶるやうやはあらんあらざらめども　
六つにて位に即かせ云々　第八十二代後鳥羽天皇。

し、この國にはいと數多も聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に崇德院の世を亂り給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照大御神も御裳濯川の同じ流と申しながら、なほ時の御門を守り給はする事は強きなめり」とぞ古き人々も聞えし。また信賴の衞門督おほけなく二條院を脅し奉りしも、終にむなしき屍をぞ路のほとりに棄てられける。かゝれば舊りにし事を思ふにも、なほさりともいかでか上皇、今上數多おはします王城の、徒に亡ぶるやうやはあらんと、たのもしくこそ覺えしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世一つの事にもあらざらめども、迷の愚かなるまへには、なほいと怪しかりし。

六つにて位に即かせ給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、す

從へ給へりしその程
津の國の云々　「津の國のこやとも人をいふべきに隙こそなけれ葦の八重ぶき」（後拾遺集、和泉式部）
のどけくおはしましぬべかりける世
月日を限りたらんだに……いと心細かるべし

べて三十六年が程、この國の主として萬機の政を御心一つにをさめ、百の官を從へ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有樣にて、遠きを憐び近きを撫で給ふ御惠雨の脚よりも繁ければ、津の國のこやの隙なき政を聞し召すにも、難波の葦の亂れざらん事を思しき。藐姑射の山の峯の松も、やう〳〵枝を連ねて千代に八千代を重ね、霞の洞の御すまひ、幾春を經ても空行く月日の限り知らず、のどけくおはしましぬべかりける世を、あり〳〵て由なき一ふしに、今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちり〴〵にさすらへ、磯のとまやに軒を並べて、おのづから言問ふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽やく煙の靡く方をも、我が故郷のしるべかとばかり、眺め過させ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらんだに、あす知らぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まいて何時をはてとかめぐりあふべき限りだになく、雲の浪、煙の浪の

柴の庵の云々　「いづくにもすまれずばたゞすまであらんん柴の庵のしばしなる世に」（新古今集、西行法師）

水無瀬殿　後鳥羽天皇のお造りになつた御殿。大阪府三島郡島本村。

二千里の外云々　「三五夜中新月の色、二千里の外の故人の心。」（和漢朗詠集、白樂天の詩句）

幾重とも知らぬ境に世をつくし給ふべき御さまども、口惜しと言ふもおろかなり。このおはします所は、人離れ、里遠き島の中なり。海面よりは少し引入りて、山陰に片そへて大きやかなる巖の峙てるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴の庵のたゞしばしとかりそめに見えたる御宿りなれど、さる方になまめかしく故づきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも、夢のやうになん。はる〳〵と見やらるゝ海の眺望、二千里の外も殘りなき心地する、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹來るを聞し召して、

われこそは新島守よおきの海の
あらき浪かぜこゝろして吹け
同じ世にまたすみの江の月や見ん
けふこそよそにおきのしま守

（增鏡）

田中寛一　教育家。文學博士。東京文理科大學教授。明治十三年岡山縣に生れた。

日本民族は獨創力に於て決して劣つてゐない

右のやうな次第であるのに……認める

解說文

一〇　日本民族の獨創力

田中寛一

從來、歐米人で日本民族を批評する者は、日本民族に獨創力の缺けてゐる事を、自明の事實である如くに述べるのが普通であり、日本人自身にもまた直ちにこれを承認する傾向があつた。日本民族は果して獨創力に於て劣つてゐるであらうか。これは極めて興味があり、そして極めて重大な問題である。私はこの問題に對しては、日本民族は獨創力に於て決して劣つてゐないと答へたい。

然るに、現今日本に於ける科學の研究及びその應用に於て、全體として獨創といふものが少い。多くは西洋の模倣である。またこれを歷史に徵しても、見方によつては政治、宗教、藝術などに於て、殆ど外國の模倣でないものはないと言つてよい。即ち、現代の事實と歷史上の事實とが右のやうな次第であるのに、なほ日本民族の獨創

既　既

最も自然であり最も經濟的な方法である

親鸞や日蓮の如き新宗教を創めてゐる

力を認める理由はどこにあるか。試にその理由を擧げてみよう。

第一に、日本の建國は隣邦支那よりは遙かに後れてゐた。日本民族が支那と交通するやうになつた時には、既にかの國では著しい文化を示してゐた。かゝる場合には、先進國の文化を模倣するのが最も自然であり、また最も經濟的な方法である。そして、それは我が國が鎖國の夢から覺めて、西洋文化に接觸した時にも同樣であつて、その情勢が今日に及んでゐるのである。

第二に、過去の歷史に於てはすべて外國文化の模倣のやうであるが、必ずしも模倣に終つてはゐない。卽ち、いかなる時代にもまづ模倣はしたけれども、次第にその手本から脫化して、日本的なものを創造してゐる。これを文學に就いて言へば、漢學の輸入に次いで、假名文字の工夫は國文學を發達せしめ、その方面に多くの獨創的なものを作り上げてゐる。またこれを宗教に就いて見るに、親鸞や

フィエ　フランスの哲學者（西紀一八三八―一九一二年）

タルド　フランスの社會學者（西紀一八四三―一九〇四年）

西洋にたものでないものがある代りに創められ日本

日蓮の如き、日本獨得の新宗教を創めてゐる。これをしも獨創と言はなければ、何を獨創と言ふか。元來、純粹な模倣もなければ、また純粹な獨創もないものである。フィエが言つてゐるやうに、模倣は必ずしも獨創の精神の缺けてゐる事を示さない。模倣と獨創とは隱れた調和を有つてゐるもので、互に相反對するものではない。獨創も決して無から起る事はない。タルドが「模倣は合流して發明となる」と言つたのは正しい。單に表面的觀察をしてゐるから、日本民族に獨創の力がないと言ふのである。

第三に、民族によつて獨創力を示す方向が異なつてゐる事を忘れてはならぬ。西洋に創められたもので日本にないものがある代りに、日本特有なもので西洋人の企及し得ないものがある。西洋の管絃樂は日本になかつたけれども、三絃樂や謠物などは、日本民族の獨創である。また支那や西洋にある武器は、それ〴〵の民族の特

後藤子爵　政治家。伯爵。名は新平。岩手縣の人。昭和四年歿、年七十二。

百濟河成　平安時代初期の畫家。仁壽三年（一五一）歿、年七十二。

巨勢金岡　平家時代初期の畫家。

惠心僧都　平安時代中期の天台宗の僧。名は源信。寛仁元年（一一七七）寂、年六十六。

元信　室町時代末期の畫家。狩野氏。永祿二年（一二二九）歿、年八十三。

探幽　江戸時代初期の畫家。狩野氏。名は守信。延寶二年（二三四）歿、年七十三。

道元　鎌倉時代中期の僧。曹洞宗の始祖。建長五年（一九一三）寂、年五十四。

仁齋　江戸時代中期の儒者。伊藤氏。名は維楨。京都の人。寶永二年（二三六）歿、年七十九。

素行　江戸時代初期の儒者、兵學者。山鹿氏。名は高祐。會津の人。江戸に住んだ。貞享二年（二三四）歿、年六十四。

關孝和　江戸時代中期の數學家。上野の人。寶永五年（二三六八）歿、年六十七。

高峯讓吉　化學者。藥學博士、工學博士。金澤市の人。大正十一年歿、年六十九。

徵を示してゐるが、日本刀の製作に至つては、いかなる民族にも追隨を許さない程度の獨創である。更に我が劍道と柔道とに至つては、西洋のフェンシングやボクシングとは全く獨立に發達したもので、その性質は著しく異なつてゐるのである。

第四には、右の如き見地からみれば、過去に於て日本民族中から獨創的天才が輩出してゐる。後藤子爵がその著「日本膨脹論」中に揭げられたものだけを摘記しても、百濟河成、巨勢金岡、惠心僧都、雪舟、元信、探幽、光琳の如き藝術家があり、柿本人麻呂、山部赤人、紫式部、西行、芭蕉、西鶴、近松、馬琴の如き文學者があり、聖德太子、弘法、傳教、道元、法然、親鸞、日蓮の如き宗教家、思想家があり、豐太閤、家康の如き武將があり、藤樹、仁齋、白石、素行、象山、松陰の如き學者、德行家があつた。そしてこれ等の人々や、これ等に匹敵すべき多くの人々は、皆世界的の天才として認められる資格を備へてゐる者であつて、たゞその業績が西洋に餘り紹介されてゐないだけである。勿論、近世に發達した科學的天才に至つては極めて乏しい。しかし、それは模倣時代を距る事が遠くないからである。しかも、乏しいとは言へ、過去に於て誇るべき數學的研究があつた事を想ひ出さずにはゐられない。即ち關孝和等一團の人々の研究の如きはその一例である。

第五には、現代に於て日本民族中に獨創的研究を出した者が少くない事である。歐米に發達した科學的研究を輸入して以來、約五十年を經過した。その大部分の歲月は全然模倣を事とした。しかし、今や種々の科學に於て、歐米の學界に出して誇とするに足る研究が續出しつゝある。米國で活動してゐた故野口英世博士や、米國で有名になつた故高峯讓吉博士の二人を擧げただけでも十分である。その外、水銀から金を造る事に成功した長岡半太郎博士、ビタミンA抽出に成功した高橋克巳博士の如き、數へ上げれば、世界的の

長岡半太郎　科學者。理學博士。元大阪帝國大學總長。慶應元年（二五二五年）肥前國（長崎縣）に生れた。

高橋克巳　農學博士。和歌山縣の人。大正十四年歿、年三十六。

ライト兄弟　兄は（西紀一八六七―一九一二年）、弟は（西紀一八七一―）

二宮忠八　元飛行神社神官。京都府の人。昭和十一年歿、七十一。

今まで　發表された中に　決して　少くない

名聲を博してゐる人々は、いはゆる自然科學の方面にも多數ある。

また最近長足の進歩をなした飛行機に就いて見るに、最初飛行したのは米國のライト兄弟で、それは明治三十六年の事であるが、それよりも十年前に、我が二宮忠八氏は既に一種の飛行機を發明してゐる。然るに西洋人の發明でなければ信用しないといふ當時の時勢がこの尊い發明を實用に供するところまで發達せしめなかつたのである。

飜つて文化或は精神科學の方面を見るに、その研究が多くは日本語を以て發表されてゐる爲に、世界的に注意をひかないのであるが、今まで發表された中に、獨創的研究と認むべきものは決して少くない。

第六には、日本の過去に於ける社會的環境が、獨創力を現すに不適當であつた事である。即ちその一は、政權の存在がたび〳〵變轉

農業に　從事する者は　代々農業に　武人は　代々武人であつた

日本民族は……缺けてゐるのでない　事が　分るであらう

隨つて　西洋畫で　傑出した　作が　まだ　出來なかつた

して、獨創力を現す機會を少くした事、その二は、階級制度が發達して、職業が殆ど各の家族に固定した事である。農業に從事する者は代々農業に、武人は代々武人であつた。政權を握る程の家からの者は、民族中でも優れた素質の所有者であるが、それが階級制度の結果として、代々同じ職業に從ひ、しかも勢力の消長が極めて頻繁であつたから、獨創力を武事以外に發揮する事が少かつたのである。

以上の諸點を綜合して考へると、日本民族は決して獨創力に於て缺けてゐるのでない事が分るであらう。從來諸外國人の日本民族に就いての批評は、日本民族に特有な方面を見逃してゐた傾向があり、日本人自身は外國にあるものだけに就いて日本民族を評價してゐたのである。これを繪畫の方面に就いて見ても、日本人が西洋畫を學び始めてから餘り年月を經てゐない。隨つて、西洋畫で傑出した作がまだ出來なかつた。然るに長い歴史を有する日本畫

西洋畫と日本畫とはその力の入所が異なつてゐるのに氣が附かないで

勿論日本の思想は受けてはゐるが、その間に日本人の卓見が少くない

では、到底外國人の企及し得ない美點があり、傑作がある事を忘れてゐる。西洋畫と日本畫とはその力の入所が異なつてゐるのに氣が附かないで、何でも西洋流にやらなければならぬと考へて、自ら卑下する者が多かつた。

これを思想の方に就いて見ても同樣であつて、西洋流の考へ方と東洋流の考へ方との間には、著しい相違がある。彼は分析を主とし、これは綜合を主とする。いづれにもよい點があつて、いづれを優れてゐるとも言はれない。勿論、日本の思想は支那の思想の影響を受けてはゐるが、その間に日本人の卓見が少くない。これを捨てて顧みなかつたのは、西洋文明を取入れた時、その外形の整然たるに驚いて、自然、西洋崇拜の風を生じた結果に外ならない。

（日本民族の將來）

夫唱婦隨の道は上代からの教であるが、決して少くない

勤勉な神、平和な神であつて

一一　我が國各時代の代表的婦人

日本は男尊女卑の國ではない。皇祖天照大神は女性の御身で、我が八百萬神の頭首と仰がれておいでになる。その神敕に基づいて天孫の降臨あらせられた時には、天鈿女命、石凝姥命などいふ女神たちが、供奉の主なる列に加つてゐる。これ等の神々の勳功は、今日で言へば勳一等寶冠章といふところであらう。朝鮮役の神功皇后は言ふまでもなく、それから以後女帝の御即位もたび〳〵あつた。夫唱婦隨の道は上代からの教であるが、歷史的女性、即ち國史の上に偉績を遺した婦人も決して少くない。我が國民の發達は一方に女性、即ち母たり妻たるりつぱな婦人があつたからで、男尊女卑といふやうな事で、どうして健全な國家が成立つ事が出來よう。

天照大神が勤勉な神、平和な神であつて、しかも一旦事ありと見

弟橘姫の如きは：犠牲的精神を現したものであり：大葉子などは：忠を示してゐる

れば、武裝して男たけびなされたといふ事は、まさに我が日本婦人の典型である。歴代の有名な女性には皆この面影が宿つてゐる。今後の婦人も、また必ず仰いで模範とするであらう。今各時代から一人づつその時代を代表する婦人を採つてみよう。

日本武尊に代つて海底の藻屑となられた弟橘姫の如きは、早く我が國女性の犠牲的精神を現したものであり、三韓との戰爭に夫と共に節を盡した大葉子などは、凜とした忠勇義烈の奪ふ事の出來ない忠を示してゐる。世には武士道の發達と共に女子の義烈心が出來たやうに思ふ人もあるが、上代から既に多くの例があるのである。

推古天皇以後佛法が流行して、奈良時代となつては、上下これを、尊信するやうになつた爲、この時代の女性は、佛法の慈悲の教から大いに公衆の慈善事業に努めた。光明皇后が悲田院、施藥院を置か

儒教がはいつてから：お考へになるやうになり

上流社會の婦人には：努力した人が少くない

和氣廣蟲延暦十八年（一四五九年）歿、年七十。

清麿が道鏡に退けられた時：遭つたが

れて、貧困病苦の者を憐まれ、また浴室を築いて、隨意に入浴を許さ・れたといふやうな事は、人も知つた話である。儒教がはいつてから、天皇親らが政治の得失を自己に引當ててお考へになるやうになり、皇后は佛法の慈悲で頻りに國民を惠まれて、慈善の行がある。どちらにしても、皇室が先に立つて下を恤まれるといふ事で、まことに辱い事であつた。それ故上流社會の婦人には、これに見倣つて慈善救濟の事業に努力した人が少くない。その代表者としては、和氣廣蟲卽ち法均尼を擧げたいと思ふ。この人は清麿の姉で、貞順で慈悲深い婦人であつた。學問もなか〳〵あつた人である。藤原仲麿の亂の平いだ後、民間が疲弊して棄兒をする者が多いので、これを憐んで拾ひ集め、悉く自分の養子として育て上げた。その數が八十三人。これは小學校の教科書にも出てゐるから、誰も知つてゐる。清麿が道鏡に退けられた時、一時流罪に遭つたが、後再び召還されて、正

男子が……憂身をやつした時代に於て……模範を遺した

歷伏されたやうに見えながら……獨得の文藝を發達させた

四位上典侍まで進んだ。光仁天皇の仰に「大抵の人は人の惡口を言ひたがるが、法均尼ばかりは未だ曾て人の短を言つた事がない。」と仰せられたさうである。まことにりつぱな人格である。口先ばかり上手で、裏面へ廻つて互に嫉妬をするやうな僞慈善家とは、全くその選を殊にしてゐる。

平安時代の婦人は文藝に於てその功績を留めた。男子が多く支那文學の模倣に憂身をやつした時代に於て、優美な假名文を作爲して、後世文學の模範を遺した。美術工藝一般のものが、隋、唐の文明を加味して、純日本趣味を發達させた時代に於て、文學の方面は女子によつて開かれ、男子をして顏色なからしめた。他の語を以て言へば、日本國民の鬱勃たる發展的勢力は、女子の手によつて大いに發揮されたと見るべきで、他の諸國のやうに、外國文明に全く壓伏されてしまふ事はなかつたのである。優勢な外國文明に壓伏されたやうに見えながら、女子が卻つて獨得の文藝を發達させたといふ事は、世界に類のない事であらうと思ふ。この時代の代表者としては、どうしても源氏物語の著者たる紫式部を推さねばなるまい。清少納言、和泉式部、赤染衞門、伊勢大輔などの多數の才媛、どれをどれと優劣を定めるわけにはゆかぬが、源氏物語が後世に及した大影響から考へ、日本文學の大立者たる點から見て、まづ紫式部を平安才媛の代表者と見るが妥當であらう。

榮華も……變るやうになつて

武人の……重んずる風は……貞操と現れて

優美婉麗な藤原の榮華も、何時しか武士の世と變るやうになつて、これ等才媛は再び見る事が出來なくなつた。平安時代の才媛は文字通りの才媛で、榮華に耽り虛榮に憧れて、節操といふ點に於ては缺けるところがあつたが、それが鎌倉となつては、武人の節義を重んずる風は、婦人の身にも貞操と現れて、はかない白拍子の中にも、堂々有髯男子を瞠若たらしめた者がある。また武勇にかけても、

男に負けぬ者さへ出來た。常盤、靜、巴、板額は皆この時代の婦人である。世は質素儉約を第一として、はでな平安時代とはうつて變つたぢみな時代である。青砥藤綱の儉約話が傳はつてゐる時代の女性としては、松下禪尼を推さうと思ふ。執權時賴の母として、自ら障子の切張をする事などは、平安時代の才媛の夢にも思はなかつたところであらう。それであればこそ、その子の時賴も味噌で酒を飲むやうな儉素を守る事が出來、鎌倉執權中の名執權となり得たのである。

青砥藤綱　北條時賴に仕へた人。

その子の時賴も儉素を守る事が出來

鳶は鷹を產まぬ。りつぱな武士の母はりつぱな婦人である。吉野朝時代の瓜生保の母、楠木正行の母、よくその子を訓誡してその夫の名を辱めぬ。大義名分を明らめて王事に殉じた家庭には、常に賢母良妻のあつた事を記憶せねばならぬ。夫や子の討死を聞いても、君の爲、義の爲とあれば、びくともせぬといふ日本婦人の壯んな勇

瓜生保　越前の人。延元元年（一九六年）金崎城で戰死した。

氣は、かういふ變亂の世になつては、再び大いに發揮されて來たのである。これは平安時代の優柔太平の世には、一旦隱れてゐたのであつた。細川忠興の妻や、杉原忠興の妻や、數多い烈女はあるが、武士の妻の典型としては山內一豐夫人を擧げたい。これは平生の心掛を見るに足るからである。日頃は貧苦に甘んじて質素儉約を守るが、夫の一大事と見て大金を拋ち出す。その用意、その深慮、まことに武人の家を齊へて行くに足る人である。やゝもすれば、夫の收入不相應な贅澤に流れようとする現代婦人などの、大いに恥ぢなければならぬ事ではあるまいか。一旦の變に逢つて壯烈な行をなすのは易いが、平素の念頭一日も夫を忘れぬのが貴いところである。山內家の今日あるは、半ば夫人の功によると言つてもよからう。

細川忠興の妻　明智光秀の第三女。

杉原忠興の妻　山名豐滿の女。

數多い烈女はあるが……山內一豐夫人を擧げたい

その用意、その深慮、まことに武人の家を齊へて行くに足る人である

武士の妻といふ觀念は、不俱戴天の仇を報いるといふ事に於て、一歩も男子に讓らぬといふ風を生じた。夫の仇を報いた津田八彌

津田八彌の妻　名は勝子。初め織田信行の侍女、後德川家康に仕へた。

尼崎理也　丸龜藩の足輕幸左衛門の女。

母は……自害して果てた。

近松門左衛門　江戸時代中期の文學者。姓は杉森、名は信盛。巢林子、平安堂等の號がある。享保九年（一七二四年）歿、年七十二。

の妻、父の敵を討取つた尼崎理也女をはじめ、女子の復讐を遂げた者は頗る多い。江戸時代に於けるこの精神を代表する夫人として、こゝに原元辰の母を擧げる。元辰は卽ち赤穗四十七士の一人。母はその身のあるが爲に、子の復讐の志が鈍らうかとの心配から、自害して果てた。卽ち死を以てその子を勵ましたのである。一死以て主君に殉じた事は、明らかに四十七士の人々と同じである。

江戸時代は學問も盛んに起つて、女流の學者もなか〳〵多い。歌人もあり、俳諧者もある。歷史家もあり、勤王家もある。明治を經て今日の聖代になつては、何事も昔に優つて、後生恐るべしであるが、だんだん發展する國運を思ふにつけても、祖先の女性の遺績を心に留めて、一層奮發するところがなければならぬ。

一二　滋野井子別れ

近松門左衛門

其所に　待ちやゝ

近松門左衛門

お側の衆に囃されて、稚心の姫君、かうおもしろい吾妻とは、今までおれは知らなんださあ〳〵往かう、はや往かう。「やあござらうとおつしやるか。そりや、めでたいわ〳〵。またもや御意の變らぬ間に、行列揃へ」。と立騷ぐ。お乳の人は勇みをなし、「そんならま一度、大殿樣、お袋樣とお盃。これも馬子殿お蔭ぢや、出來いた〳〵。そちには禮言ふ褒美やる。其所に待ちやゝ」。とさゞめき渡り、奥にお供し入りにけり。

馬方は、遂に見ぬ金の間をうそ〳〵と、のぞき廻れど筵のほか、踏みもならはぬ備後表。「えゝ、この座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも、こつちのうちがけつこでござる」と、獨言してゐたり

ありがたう　戴きや

けり。

お乳の人は大高に、お菓子さま〳〵文匣に盛入れ、どれ〳〵、三吉其所にか。まあ〳〵そちはけな者ぢや。道中雙六お目にかけ、それ故に姫君様、お江戸へござろと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、ありがたう戴きや。お錢三筋、買ひたいもの買やゝ。殊にそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身は、よく〳〵であらう。」と、いと懇の詞の末、三吉つく〳〵聞きすまし、「由留木殿の御内、お乳の人の滋野井様とはお前か。そんならおれが母様。」と抱きつけば、あゝ、こは慮外な、おのれが母様とは。馬子の子は持たぬ。」と、もぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、何の、ない事申しませう。わしが親はお前の昔の連合、この御家中にて番頭、伊達の與作。その子は私。此方様の腹から出た與之介はわしぢやわ

お出なされた

杏掛　今奈良縣添上郡田原村の字。

鳥羽の祭　京都市下京區鳥羽にある城南神社の祭。例祭は九月二十日。

死んでのけましたた

見　さしやんせ

ねて下され。

いの。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覺え。杏掛の姥が話には、『母様も離別とやらで殿様に御奉公、こなたを姥が養育し、父様に逢はせたう思へどもかひもない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋野井様と尋ねよ。』と、懇に教へて、姥はおれが五つの年、ひさしう痰を煩うて、擧句に鳥羽の祭に往て、餅が喉に詰まつて終に死んでのけました。在所の衆が養ひで、やう〳〵馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉公しまする。これ守袋を見さしやんせ。何のうそを申しませう。お前の子に紛れはない。外に望みはなんにもない。父様を尋ね出し、一日なりとも三人一所にねて下され。みごと杏を打ちまする。この草鞋もわしが作つた。晝は馬を追うて、夜は杏打ち草鞋作り、父様、母様養ひませう。父様と一つにねて下され。拜みまする母様。」と、取附き、抱附き、泣きゐたり。

どうせう

大きうたのなりやつ

お乳は、はつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之介、守袋も覺えあり、飛びついて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ、大事の御奉公、養ひ君のお名の瑕、僞つて叱らうか。いやかはいげに、さうもなるまい。まあちよつと抱きたい。あゝ、どうせう」と、百千色の憂き涙、雙つの眼には保ちかね、咽び沈みてゐたりしが、「いや〳〵、我が子ながらもさかしい者、僞つて眞とせず、母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんもの」と、涙のごうて氣を鎭め、「此所へ來い、與之介」と引寄せて兩手を取り、「さても大きうなりやつたの。とても成

滋野井子別れの舞臺面

母が乳を上げまし

なれども腹を切らせては女房が家に置かれぬ

人せうならば、侍らしう、何故尋常にも育たぬぞ。顏の道具、手足まで、母はかうは生みつけぬ。美しい黑髮をこのやうに剃りさげて、手足は山のこけ猿ぢやぼんに氏より育ちぞ」と、またさめ〳〵と泣きけるが、「これ、ものを合點しや。腹から生んだは生んだれども、今では子でも母でもない。あさましうなりさがつたを、嫌うて言ふではさらさらない。こゝの譯をよう聞きやゝ。母はもと御前樣の奉公人、與作殿は奧小姓。殿樣の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿はだん〳〵奏者役、番頭、千三百石までお取立て、追腹程の御恩の家。その間にそなたをまうけ、上には姫樣御誕生。御內證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも、今家老衆の子同然に、二番と下座にさがらぬ人。情なや父樣が、江戸詰に大事のところを仕損ひ、また切腹に極つた。なれども腹を切らせては、女房が家に置かれぬ時には、大事のお姫樣の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母をそのま

尤も夫婦の道は立つ

御勘氣の末氣遣ひな興作の子とばし言やんなや

御訴訟なされ下されかし

ま残さうため、父様の命助かり奉公構ひの御改易。その時母も一緒に退けば、尤も夫婦の道は立つ。『お姫様の乳離れ、お苦しみをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰が何時の世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれ。』と、父様のことわり故、第一は夫の爲、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたわいの。男の子は幼うても、御勘氣の末氣遣ひな、興作の子とばし言やんなや。さあ、早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生れ性、現在我が子に馬追させ、夫の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よ、お局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になること」と、聲を忍びに泣くばかり。

子は生れつき賢くて、聞分けある程なほ泣入り、「悲しい話を聞きました。さりながら常々姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし」と言へば、ちやつと口を押へ、「あゝ〳〵、勿體ない。その乳兄弟言はぬこと。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體、三吉といふ馬追が、乳兄弟にあるなどと、どう妨げにならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。輕いやうで重い事。ひそ〳〵言うて人も聞く。まづ早う出てくれ」と、泣く泣く言へば三吉、「あゝ、母様あんまり遠慮過ぎました。まづ言うて見て下され。」まだ言ひをるか、聞分けない。夫の事、我が子の事、母に如才があるものか。合點の悪い、聞分けない」と、制するうちに奥よりも、「お乳の人はどこにぞ。御前から召します」と呼ばはれば、「あれ聞きや。人が來る。出てたも」と手を取つて引きいだす。

まだ言ひをるか

出てたも

怪我しやんな

不便や三吉しく〳〵涙、頬冠して目を隠し、沓見まつべて腰に附け、見すぼらしげな後影、「こりや、ま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風、雪ふり、夜道には、腹が痛いと作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒なもの食はずに、腹や麻疹の用心

しや。かはいのなりや、いた〳〵しや。千三百石の代取が、何の罰ぞ、咎めぞ。」と、式臺の段箱に、身を投伏して歎きしが、懷中の有合せ一歩十三、袱紗に包み、「これたしなみに持つてゐや。」と涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り恨めしげに、「母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。その一歩もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が總領ぢや。母樣でもない他人に、金もらはうはずがない。えゝ胴慾な母樣、覺えてゐさつしやれ。」と、わつと泣出すその有樣。母は魂消入りて、「養ひ君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手放して、なんのやらうぞ。奉公の身のあさましや。」と悶え焦れて歎きける。

時に奥口さゞめいて、「早御立ち。」と姫君の、御輿舁きあげ行列立て、お乳の人の乘物を、平附けにこそ舁寄せけれ。お乳はさあらぬ顏附して、「姫君の御伽に、最前の馬方をこの乘物に引附け、お慰みに謠はしや。」「畏つた。」と宰領ども、「こりや、そこな自然薯め、謠ひをらう。」と、きご

謠はしや

つなく、「やあ、此奴はほえをるか。何ぢや、こりや忌々し。」と握り拳を二つ三つ戴きながら泣聲に、「坂は照る〳〵、鈴鹿は曇る、土山あひの、あひの土山雨が降る。」降る雨よりも親子の涙、中にしぐるゝ雨やどり。

（丹波與作待夜の小室節）

一三　源信僧都の母

今は昔、横川の源信僧都は大和國の人なり。幼くして比叡の山に登りて學問して、やんごとなき學生になりにければ、三條の大后の宮の御八講に召されにけり。八講畢りて後、賜はりたりける捧物のものども、少し分けて、大和國にある母の許に、「かくなん后の宮の御八講に參りて賜はりたる。はじめたる物なれば、まづ見せ奉るなり。」とて遣しけるに、母の返事にいはく、「おこせ給へる物どもは喜びて賜はりぬ。かくやんごとなき學生になり給へるは、限りなく喜び申

横川　比叡山三塔の一。

源信　世に横川僧都といふ。寛仁元年（一〇一七年）寂、年七十六。

三條の大后　第六十四代圓融天皇の皇后。

法師になし聞えし本意にはあらず

多武峯の聖人　增賀上人。天台宗の高僧。大和多武峯に住んだ。長保五年（一〇〇三年）寂、年八十七。

す。但し、かやうの御八講に參りなどしてあるき給ふは、法師になし聞えし本意にはあらず。そこにはめでたく思はるらめども、嫗の心にはたがひたり。嫗の思ひしことは、女子は數多あれども、男子はそこ一人なり。それを元服もせしめずして比叡の山にあげたるは、學問して身の才そなはりて、多武峯の聖人のやうに貴くて、嫗の後世をも救ひ給へと思ひしなり。それに、かく名僧にて花やかにあるき給はんは、本意にたがふ事なり。われ年老いぬ。生きたらん程に、聖人にしておはせんを心安く見置きて死なばやとこそ思ひ侍れ」と書きたり。

僧都これを披きて見るにも、涙を流して泣く〳〵また返事を遣していはく、「源信は更に名僧たらんの心なし。たゞ母君の生き給へる時、かくの如くやんごとなき宮ばらの御八講などに參りたるを、聞かせ奉らんと思ふ心深くして、急ぎ申しつるに、かく仰せられたれば、極めてあはれに悲しく嬉しく思ひ奉る。さらば仰せに隨ひて、山籠りを始めて聖人にならん。今は逢はんと仰せられん時にぞ參り侍るべき。然らざらん限りは山を出づべからず。但し母と申せども極めたる善人にこそおはしましけれ」と書きて送りつ。その返事にいはく、「今なん胸おちゐて、冥途も安くおぼゆる。返す〳〵嬉しく思ひ聞ゆ。ゆめ〳〵おろそかにおはすべからず」と。僧都これを見て、この二度の返事を法文の中に卷きおきて、時々取出して見つゝぞ泣きける。

見えんにやは罪は滅びんずる

かくて山に籠りて六年は過ぎぬ。七年といふ年の春、母の許に言ひ遣していはく、「六年は既に山籠りにて過ぎぬるを、久しく見奉らねばこひしくや思し召さん。然らばあからさまに詣でん」と。返事にいはく、「げにこひしくは思ひ聞ゆれども、見えんにやは罪は滅びんずる。なほ山籠りにておはせんを聞かんのみぞ嬉しかるべき。これ

より申さゞらん限りは出で給ふべからず」と。僧都これを見て、この母君は常人にもなき人なりけり。世の人の母はかく言ひてんやと思ひて過す程に、九年になりぬ。

告げざらん限りは來るべからずと言ひおこせたりしかども、怪しく心細く思ひて、母の俄にこひしく覺えければ、若し母君の失せ給ふべき時の近くなりにたるか、またわれ死ぬべきにやあらんとあはれに覺えて、さはれ來るべからずとは宣ひしかども、詣でんと思ひて出で立ちて行くに、大和國に入りて、途にて文を持ちたる男に逢へり。僧都、「いづくへ行く人ぞ」と問へば、男のいはく、「しか〳〵の母君の、横川におはする子の御坊の許へ遣す文なり」といふ。「しか言ふは我なり」といひて、文を取りて、馬に乘りながら行く〳〵披きて見れば、母君の手にはあらで、賤しのさまに書かれたり。胸ふさがりて、いかなる事のあるにかと覺えて讀めば、「日頃なんともなく、風の

限りの時になりぬればにや

起りたるかと思ひつるに、年の高きけにやあらん、この二三日弱りて、力なく覺ゆるなり。申さゞらん限りは出で給ふべからずとは心強く聞えしかども、限りの時になりぬればにや、今一たび見奉らまほしくてたへがたく、限りなくこひしく覺え給ふれば申すなり。とくとくおはせ」と書きたるを見るに、怪しく心にかく覺えつるは、かくありければにこそありけれ。親子の契はあはれなる事とはいひながら、佛の道にあながちに勸め入れ給ふ母なれば、かくは覺えけるなりと思ひつゞくるに、涙雨の如く落ちけり。

弟子なる學生ども二三人ばかり具したりければ、それ等にも「かかる事のありければなり」と言ひて、馬を早めて行きけるに、日暮にぞ行き著きたりける。

急ぎ寄りて見れば、むげに弱くなりて、頼もしげもなし。僧都、「かくなん詣で來たる」と高やかに言へば、母君、「いかでとくはおはしつる

逢ひ給ふまじきにかとこそ思ひつるに

親は……子は……善知識かな

ぞ。けさ曉にこそ人は出し立てつれ」と。僧都のいはく、「かくおはしければにや、近頃こひしく覺え給へつれば參りつる程に、途にして使には逢ひたるなり」と。母君これを聞きて、あな嬉し。死の時には逢ひ給ふまじきにかとこそ思ひつるに、かくおはし逢ひたること、契深くあはれにもありけるかな」と息の下に言へば、僧都のいはく、「念佛は申し給ふか」と。母君、心には申さんと思へど力なきに、合せて勸むる人のなきなり」といふ。僧都貴きことどもいひ聞かせつゝ、念佛を勸むれば、母君懇に道心を起して、念佛を二百遍ばかり唱ふる程に、曉方になりて、消入るやうにて失せぬ。僧都のいはく、「われ來らざらましかば、母君の臨終はかくはなからまし。われ親子の機緣深くして、來り逢うて念佛を勸めて、道心を起して、念佛を唱へて失せ給ひぬれば、往生は疑なし。況や、われを聖の道に勸め入れ給へる志によりて、かくは終は貴く失せ給ふなり。されば親は子の爲、子は親の爲に限りなかりける善知識かな」と言ひてぞ僧都涙を流して泣きける。その後七七日の法事を確かに修し畢へて、弟子引具して横川には歸りたりける。

横川の聖たちもこれを聞きて、「あはれなりける親子の契かな」と言ひてぞ、泣く〳〵貴びけるとなん語り傳へたるとや。（今昔物語）

一四　母の完成

下田次郎

下田次郎　教育者。文學博士。東京女子高等師範學校名譽教授。明治五年廣島縣に生れた。

たとひ……長らへてゐても

母といふものは人間に限つたことではありません。下等動物にも母はあります。然し、昆蟲の如きは、母が卵を生みつけて置くだけで、卵が蟲になる頃には、もはや母はゐない。また母がゐなくても育つのです。それで母は卵を生んで置きさへすれば、母の役目は濟む。これは本能的にする事で、別に修養も何もいる事はないのです。たとひ卵が蟲になる時まで母が生き長らへてゐても、別に子に教へ

飲ませたり……教へたりする。

る必要もない。更に進んで高等の動物となると、母が子を生んだ後に、乳を飲ませたり、また食物を取る事を教へたりするものもあるが、その爲に母が別に修養する必要はないのです。例へば猿の母の修養などと言へば、既に滑稽に聞えるくらゐのものです。

ところが人間となると、母が子をたゞ生みはなして置いただけでは、子は育たないのです。哺乳をはじめ、養育しなければ身體は成長しないし、身體が成長しても精神が發達しなければ獨立する事が出來ない。即ち人間に至つて初めて教育が必要なのであつて、ここに母としての修養も必要となつて來るのです。

人の母はまづ胎内で子を作り上げ、生れた後にはこれを育て上げる。即ち教育といふものは、姙娠の引きつゞきの仕事であつて、母に最も適當な仕事であると言つてよい。それで婦人の天職は子を生むといふ事ばかりでなく、生んだ後の自然の引續きとして、教育するといふ事がなくてはならない。即ち子供の教育は姙娠の如く、婦人の、特に母の天職であります。文化が進むと生活が複雜になり、その内容が進んで來るから、隨つてその準備を與へる教育も長くかゝることになる。野蕃人の子は親のする事を見やう見眞似で、何時の間にか覺えてしまふが、文明人の子供はたゞ見やう見眞似だけでは、一人前にはなれないので、特別に教育しなければならない。隨つて文明人は、子供の時が、換言すれば未成熟の時期が長い。文明が進む程、人の未成熟期は伸びる傾きがある。身體は凡そ二十年くらゐで一通りの成長を遂げるが、精神の方はその後までも教育が續くので、高等教育を受けるとなると、二十五歳くらゐまでもかゝるのであります。

それならば、母の教育といふのは、その中のどの邊を受持つのかといふと、普通には幼時の教育が母の受持のやうに考へられてゐ

ケイ　婦人評論家。（西紀一八四九―一九二六年）

スペンサー（西紀一八二〇―一九〇三年）

る。然し、後にも言ふやうに、母の教育は幼時だけのものではなく、成長の全時期を通じて行はるべきものであります。昔から、婦人が母となれば、母の本能といふものがあつて、修養を積まないでも、おのづから母の任務は盡されるやうに考へられてゐました。それでスウェーデンのエレン・ケイも、「母心は理解されるよりも一層多く歌はれた。母の本能は誤つ事のないもので、別にこれを教育する必要はないと我々は誤想してゐた。隨つて、今日まで母心は教育されずに放つて置かれたので、母心は盲目で未熟で無法な事も少くなかつた。母の本能は無學の爲に子を殺し、また子供の最も尊き心身の所有を奪ふ事を防ぐことが出來なかつた。されば母心は何時も神聖で間違なき力であるとの感情的見解は止めて、これを教育せねばならぬ」と言つてゐます。

またイギリスの哲學者スペンサーは、「解剖を學ばないで外科醫

スミス　イギリスの女流詩人、小説家。（西紀一七四九―一八〇六年）

それで今日の急務は……事である

となる者があれば、我等はその大膽に驚き、その被術者をあはれむだらう。然るに身體、知識、道德に關して何等の見識なしに、兒童教養の難事業を親が始めても、親の向ふ見ずに驚き、犧牲たる子をあはれむ者なきは不思議ではないか。」と言つてゐます。スミス夫人も「今日地上のあらゆる專門家のうちで、母といふものくらゐ自己の不朽なる事業に對して素養の乏しい者はあるまい。多くの母は幸ひにして正しい天性を授けられてゐるが、悲しい事には、正しい見識を有する母は至つて少い。子供の生涯がいかにならねばならぬかは、大概りつぱに心得てゐるが、さてどうすれば望むやうな結果が得られるかを考へてゐる母は甚だ少い。それで今日の急務は、この問題に對して聰明なる見識を以て、自然のまゝに放任された狀態を變へて行く事である。約めて言へば、ちやうど他の學問を研究するやうに、思を潛めて母の道を研究し、母の天性に加へて、眞の條理

西洋の母は……教育を受け隨つて……備へてゐる

何としようくらゐは考へてゐるせう

を會得した母となつてもらひたいのである」と言つてゐます。

これ等の希望は、西洋の人が西洋の母に向つて訴へたのであるが、これがまた適切に我が國の母にも當てはまるやうに思ひます。西洋の母は概して我が國の母よりは高い教育を受け、隨つて教育上の見識を備へてゐるにも拘らず、かやうな注意がいるのを見れば、我が國の母には一層強くこの注文をしなければならないと思ひます。實際子供を抱いて往來でも歩いてゐる婦人に、この子供はどういふ風に教育なさるつもりかと言つて聞いて見たら、はつきりとした答をする婦人は少いだらうと思ひます。何としようくらゐは考へてゐるでせう、卽ち教育の目的の意識はあるでせうが、さてどうすれば良いかといふ事になると、茫然として手も足も出ないやうな婦人が多くはないでせうか。今日の婦人は、まづ母に目覺めねばなりません。婦人が子供を生めばおのづから母心は出て來ます。この母心はいはゞ鑛石のやうなもので、そのまゝにして置いては、往來の砂利石と變る所はない。これを切つて磨いて、始めて金剛石の光輝を發するのです。日本の母は言はゞ鑛石のまゝにころがつてゐる石のやうなものです。それに磨きをかけるといふのが、卽ち母の修養であります。

（婦人と希望）

白鳥省吾詩人。明治二十三年宮城縣に生れた。

自修文

幼兒の生活と童謠

白鳥省吾

童謠は幾つから作るか、こゝに「表現されない言葉」といふものを認めるならば、幼兒はその誕生の日から童謠を表現してゐるといふ事も言ひ得る。これは詭辯に類するが、幼兒の姿態、その表情のかはいらしさ、乳を吸ふ甘さうな顏、湯をつかはす時の眞面目さうな顏や兩手の拳、その一々は童謠に類する表現である。ねんねん眠れの子守唄は既にその時から聽くのである。この「アイ

ウエオ」の整はぬ發聲と、泣く事の外に言葉を持たない幼兒にも、吾々は「表現されない言葉」を發見するであらう。

それがいくらかの意味をもつた片言を言ふやうになる。しかし、これ等の片言がはつきりした感情を表現し得るのは滿二歳後からであらう。その幼兒の言ふ事に耳を傾けたならば、いかに多くの童謠をその日常生活の中から拾ひ出す事であらう。

鏡

はあ――、
あつちもお風呂なァなァ
ぼうやもあつちなァなァ

これは三歳の子供が風呂場の大きい鏡に向つて、無心に話しかけた言葉である。その驚きがいかにもありのまゝのリズムをなしてゐるではないか。

自動車

赤い自動車とね
黃色い自動車とね
黑い自動車とね

三人で走りました。

これは北原白秋が「滿二歳九箇月になるうちの坊や」の言葉そのまゝを童謠の形としたものである。三人といふ擬人法もいかにも自然に聞える。親がその子の言葉の中に童謠を發見する事は、その子にとつても親にとつても幸福な事でなければならない。

次に私の長男の生立ちから拾集して見よう。三月生れの彼は數へ年二歳の末には、オトーチャン、オカーチャン、ネーヤ、ハイチャ、ゴハン、アンヨ、テテ、アメ(雨)、イロ〳〵(本)、ポッポ、ワン〳〵、ニャン〳〵、オツツ(汁)、メイチ、(牛乳)などいふ片言をはつきり言ふやうになつた。滿二歳になると、生物に對して愛憐の心を持つやうになつた。鷄が夕方小屋の中にうづくまつてゐるのを見て、

とつと、
寒め〳〵と言つてるから、
おふとん買つてかけてね。
雨が降つて來るのを見ると、
雨
冷たい〳〵と言つて
降つて來る。
雨そのものも小さいかはいらしい生物に見えるのである。風があつて、月のよい晩に、時々雲が月の傍を通るのを見ると、月がいかにも急いで走つてゐるやうである、
お月さん
わつしよい、わつしよい。
夕立の中に雷が烈しく鳴つてゐる時、
雷さんのべんべも

土肥溫泉　靜岡縣田方郡土肥村。

沈丁花　常綠灌木。高さ三四尺。葉は軟革質で長楕圓狀披針形。春早く枝端に薄紫の小花を簇出して、強い芳香を放つ。

ぬれるでせう。
滿三歳の頃には、夏の夜の月に對して、
お月さん
おりて來い
ごはんをいつしよにたべよう。
伊豆土肥溫泉に轉地してゐた時、波の荒れてゐる海岸に立つては、
あの波（めんめ）
てつてひろげて
ヤーといつて來る。
それが滿四歳に近づくと、いくらか長い言葉を言ふのである。庭に沈丁花（ヂンチヨウケ）のつぼみのふくらむのを見て、
おかあちやんが
おとうちやんの入院したとき

持つて行つた花が
また咲いた。

昨年の春に私が永いこと入院生活した時、妻が沈丁花の小枝を持つて來た事があつた。これ等は言葉そのまゝがよく配列する事によつて童謠となるのである。

私がこれ等我が子の成長の經路を述べたのは、何等童謠に對する知識のない幼兒が、事物に對してどういふ感動の表現をしてゐるかといふ事に興味を持つからである。卽ち、

一　その表現は自由詩に近い自由さをもつてゐる。

二　擬人法、擬聲、擬態、品詞の反覆といふものが最も自然に用ひられて、調子をよくしてゐる。

三　感動の精髓のみを暗示的に表現する。

この三つの特質は新しい童謠の意義でなければならない。卽ち童謠はたゞ合唱の調子だけではなく、自由詩の表現が主である

落花の雪に云々「またや見ん交野のみ野の櫻狩花の雪ちる春の曙」（新古今集、藤原俊成）

紅葉の錦云々「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき」（拾遺集、藤原公任）

打出の濱　滋賀縣大津市。

ことゝ、また在來の童謠に共通な擬人、擬聲、擬態、品詞の反覆といふものも、感動の流として自然である場合にのみ生きるので、少しでもわざとらしく、意識して惡用すれば、童謠としての墮落であること、自由詩の特質もだら〳〵と敍述するものでなくして、簡潔な暗示を持つべきこと等である。

一五　落花の雪

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を著て歸る、嵐の山の秋の暮、ひと夜をあかす程だにも、旅寢となればもの憂きに、恩愛の契淺からぬ、我がふるさとの妻子をば、行方も知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。

憂きをば止めぬ逢坂の、關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の

駒もとゞろと云云
「貢物たえずそなふる東路の勢多の長橋おともとゞろに」（風雅集、平兼盛）

うねの野に云々
「近江より朝たちくれば鶴ぞなくなる明け方の田ぬこの夜は」（古今集、大歌所御歌）

篠原
同縣野洲郡。

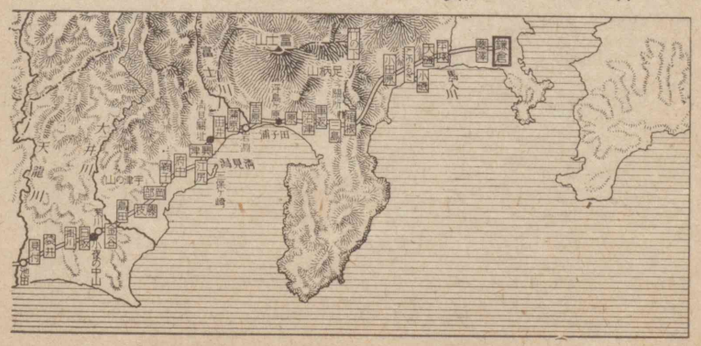
老蘇の森
同縣蒲生郡安土村の東南。

番場、柏原
共に同縣阪田郡。

汐干に云々
「うちわたす今や汐干になるみ潟とをよる舟の聲も通はず」（夫木抄、常磐井入道）

鳴海潟
愛知郡愛知郡の西方にあつた江灣の稱。今の名古屋市笠寺、星崎の南。

濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋うち渡り、行交ふ人にあふみ路や、世のうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかとあはれなり。時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風に露ちる篠原や、篠わくる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見えわかず、ものを思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、ふるさとを雲や隔つらん番場、醒井、柏原、不破の關屋は荒果てて、なほもるものは秋の雨の、何時か我が身のをはりなる、熱田の八つるぎ伏拜み、汐干に今や鳴海潟、傾く月に道見えて、明けぬ暮れぬと



池田の宿
靜岡縣天龍川の東岸にある。古へは西岸にあつた。

元暦元年
安德天皇の壽永三年に當る。（一八四四年）

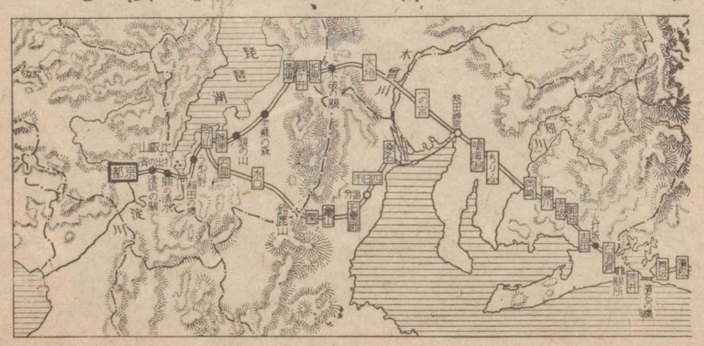
小夜の中山
靜岡縣榛原郡。金谷と日坂との間の坂嶺。

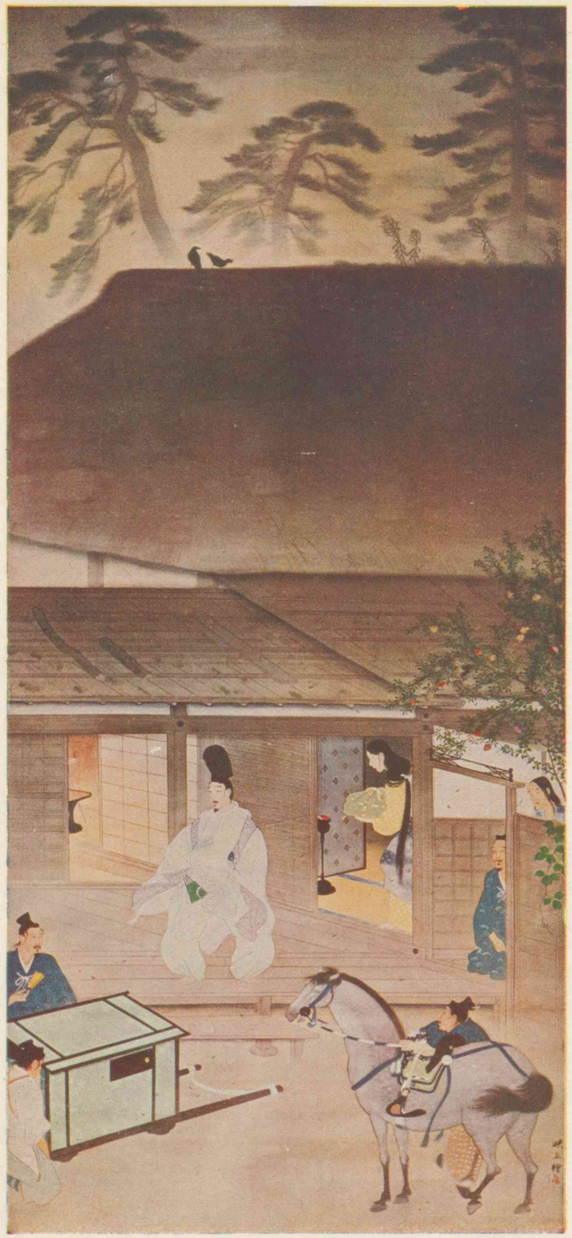
命なりけり云々
「年たけてまたこゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」（新古今集）

行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈み果てぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮の、入相鳴れば今はとて、池田の宿に著き給ふ。

元暦元年の頃かとよ、重衡の中將の東夷の爲に捕はれて、この宿に著き給ひにし、その古へのあはれまでも、思ひ殘さぬ涙なり。

旅館の燈幽かにして、鷄鳴曉をもよほせば、匹馬風にいばえて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家鄕の天を望みても、昔西行法師が、「命なりけり」と詠じつゝ、ふたゝび越えし跡までも、羨ましくぞ思はれける。





池田の宿　松岡映丘筆

足早み　ながえ(轅)

菊川　靜岡縣榛原郡。

隙行く駒の足早み、日既に亭午にのぼれば、餉まゐらする程とて、輿を庭前にかき止む。ながえをたゝいて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戰の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて殺されし時、

昔は南陽縣の菊水、
下流を汲んで齡を延ぶ。
今は東海道の菊河、
西岸に宿つて命を終ふ。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の
おなじながれに身をやしづめん

龜山殿　今京都市右京區嵯峨にある天龍寺がその舊址である。

藤枝　靜岡縣志太郡。

岡べの眞葛云々　「歸りくるほどはなけれど朝露の岡邊の眞葛うら枯れにけり」（藤原爲家）

夢にも人に云々　「駿河なる宇津の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり」（伊勢物語）

通さぬ波の云々　「駒とめて過ぎぞやられぬ清見潟ちりしく花や波の關守」（風雅集、法橋顯昭）

富士の高峯云々　「富士の嶺の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものはおもひなりけり」（新古今集、藤原家隆）

竹の下道　靜岡縣駿東郡足柄村の地。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の、嵐の山の花盛、龍頭鷁首の船に乘り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今はふたゝび見ぬ夜の夢となりぬと、思ひつゞけ給ふ。

島田、藤枝にかゝりて、岡べの眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山べを越えゆけば、つた、楓いと茂りて道もなし。昔業平の中將の、すみかを求むとて、東の方に下るとて、夢にも人にあはぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとど涙をもよほされ、向ひはいづこ三穗ヶ崎、興津、蒲原うち過ぎて、富士の高峯を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思にくらべつゝ、明くる霞に松見えて、浮島ヶ原を過ぎゆけば、汐干や淺き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、うき世をめぐる車がへし、竹の下道行惱む、足柄山の峠より、大磯、小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、いそぐ

としもはなけれども、日數積れば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ著き給ひけれ。（太平記）

こゆるぎの云々　「こゆるぎの磯たちならしぬらす菜つむなめざしなる沖にをれ波」（古今集、相模歌）

七月二十六日　第九十六代後醍醐天皇の元弘元年（一九九一年）。

伊勢　平安時代中期の歌人。第五十九代宇多天皇に仕へた。天慶二年（一五九九年）歿。

相模　平安時代中期の歌人。源頼光の女といふ。名は乙侍從。

中務　平安時代中期の歌人。中務卿敦慶親王の女。母は伊勢。

一六　關の夕風

見る人もなき山里の櫻花
　ほかの散りなん後ぞ咲かまし　　伊勢

みわたせば波のしがらみかけてけり
　卯の花咲ける玉川の里　　相模

子にまかりおくれて侍りける比
咲けば散るさかねばこひし山櫻
　おもひたえせぬ花の上かな　　中務

和泉式部　平安時代中期の歌人。越前守大江致の女。歿年不詳。

赤染衛門　平安時代中期の歌人。平兼盛の女。大隅守赤染時用の養女。大江匡衡の妻。

齋宮女御　醍醐天皇の御孫。重明親王の女。寛和元年（一六四五年）薨、御年五十。

伊勢大輔　平安時代中期の歌人。大中臣能宣の孫。高階成順の妻。

式子内親王　後白河天皇の第三女。建仁元年（一八六一年）薨。

夏の夜はまきの戸たゝき門叩き
　ひとたのめなるくひななりけり　　和泉式部

こえはてば都も遠くなりぬべし
　關の夕風しばしすゞまん　　赤染衛門

さらでだにあやしき程の夕暮に
　荻吹く風の音ぞきこゆる　　齋宮女御

なきかずに思ひなしてやとはざらん
　まだ有明の月まつものを　　伊勢大輔

　　式子内親王

宮内卿　鎌倉時代初期の歌人。後鳥羽天皇に仕へた。承元元年（一八六七年）歿。

俊成女　藤原俊成の第四女。源道具の妻。

上田秋成　江戸時代中期の文學者。文化六年（一四六九年）歿、年七十六。

山ふかみ春とも知らぬ松の戸に
たえ〳〵かゝる雪の玉水　宮内卿

花さそふ比良の山風吹きにけり
こぎ行く舟の跡見ゆるまで　俊成女

風かよふねざめの袖の花の香に
かをる枕のはるの夜のゆめ

一七　銀の猫

上田秋成

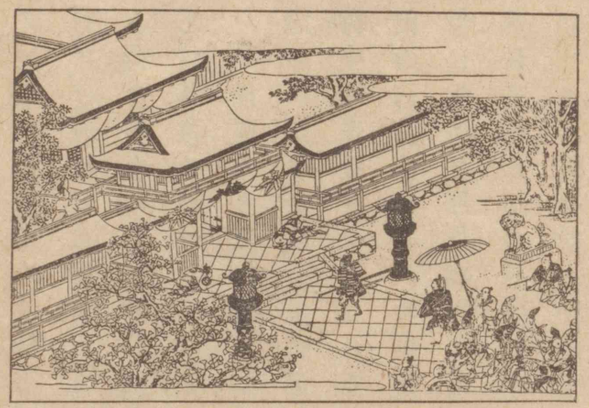
文治それの年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴ヶ岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかうまつる人々、御前追ひ、御後べつかうまつれる、渚に遊ぶ葦田鶴の歩みして、疾からず遲からず、列を亂さず練出でさせ給へるを、大路に膝折伏せ、畏み奉る人數多あるに、警衛して「あな。」とだに言はせず、世にいかめしく尊き御有樣なり。

練出でさせ給へるを。

數多あるに。

返りまをしして、御手輿に召させ給ふ程、さとき御まなじりに見留めさせ給ひ、御階の忌垣のもとに畏まりをる法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑて、いと痩せ黑みづきたるに、衣、杖、笠なども乞食者のさましたるが、目を偷みてうづくまりをる、なほ人ならずや思しけん、あの法師が修行するやう、名をも問へ。と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、ありがたく御目賜へりいづ

さとき御まなじりに見留めさせ給ひ：：なほ人ならずや思しけん



頼朝鶴ヶ岡八幡に詣づ（保元平治闘圖會）

ゆくりなきに驚きたるさまして

昔は藐姑射の山の御宮仕せしの人の……やつしたれど

こよりの修行ぞ、名をも申せ」と言ふ。ゆくりなきに驚きたるさまして、「雲水に在所定めず侍る者にて、名は圓位と申す」と言ふ。聞し召されて、「さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物のたぐひならで、賢き人得たるためしに誘ひ歸らん。我が後につきて來れと言へ」とて、召しつれさせ給へり。

御館に入らせ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶら數多照しかゝげたり。けふの道行づとゐてこ」と仰せ給ふ。「法師參れ」とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黑くやつしたれど、月花の譽はものの心なきあづま人さへ聞知りたるぞ。八百日行く濱の眞砂の中には、玉とて拾ひ收めたらんを、語りて聞かせよ」と仰せ給ふ。いみじく畏まりて、思ひかけず大木の御蔭に參り侍れば、いともかゞやかしきにぞ、たゞ夢路をたどるやうに侍り

伊勢の海云々　「伊勢の海の千尋のはまにひろふとも今は何てふかひかあるべき」（後撰集、敦忠朝臣）

うち出で侍らぬにはこれとて捧げ奉るべくもあらず

詠み得まじきものに宮人たちはさたし給へりとや

御弓矢取らしてて

て、聞え奉るべき事も侍らず。さとき御眼に見顯されて侍るこそ、いともありがたけれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひ侍れど、かひある事もうち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねて學ばせ給ふとももり聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御器物の大いなるに思し寄らせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思ひ知り侍り。大空に羽うちつけて飛ぶ鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あな畏し」と申す。

うち笑ませ給ひ、「弓取りし人のもとの心の猛きには、詠む歌も直くあからさまにと聞くはまことか。歌は武士の荒々しき心には詠み得まじきものに、宮人たちはさたし給へりとや。軍に出立ちて、笛、鼓の音、馬のいなゝきはものとも思はぬを、この三十文字餘りの學びには心の後るゝはいかに」。こは畏き御心にも思し惑はせ給ふものか。古への代々の帝は、馬に鞍置き、御弓矢取らして御軍に立たせ

詠みいでまくするこそ

大風起り云々漢の高祖の作。

烏鵲南に云々魏の曹操の作。

初より優れたらんは鬼にこそ侍らめ

秀郷藤原秀郷。田原藤太といふ。鎮守府將軍となつた。

思ひしみぬる事は忘れずてぞあらん

給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々しく、調べもいと高しとこそ聞きわたり侍れ。いでや歌詠まんとては、ますらを心をとり隱し、あてになよびかにのみ詠みいでまくするこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとく猛き御心のまゝにうちまねばせ給はんには、今の世の人誰かは並びあひ奉らん。三尺の劍を取りて、『大風起り雲飛揚す。』と歌ひ、槊を横たへて『烏鵲南に。』と詠ぜし君たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじきを磨りみがきたるも、染殿の八入の色も、はかなき目移りばかりは何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道いづれの業にも、初より優れたらんは鬼にこそ侍らめ。と言ふ。

「人々あれ聞き給へ。世は捨て遁れても、たのもしき人の心ならずや。圓位よ。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷と言ひしは、世にいみじき弓の上手となん聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそと思ひしみぬ

弦ひかんすべだに心に留め侍らず

病める士卒の云云周代の兵法家吳起が卒の疽をすつた故事。

る事は忘れずてぞあらん。事一言にても教へ承らばや。」こは益〻恐ある御問はせなり。御物語のはてゝは、つはものの道しばしも怠らせ給はぬ御心より、野山を住所の痩法師にだに問はせ給ふ事の忝さよ。向ひ奉りてはをこがましく、何をかは家の傳はりなどとて聞え奉るべき。ましてありがたき大宮仕をいなみ奉り、親たちのいつくしみをさへあだなるものに思ひなして、年わづかに二十三にして家を出でたるいたづら者の、弦ひかんすべだに心にも留め侍らず。たゞ一言の忘れがたきは、賞を重くし罰を輕くせよと言ひしと、任ずる者を辱むれば危しと言ひし事とのみ。病める士卒の疽をすひしは、人の心をよく買ひなすと雖も、まことの情よりとも覺え侍らず。かまどを減じて人を危きに陷るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下を知るべき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へる事の怪しきまで賢くおはするを、餘所ながら見聞き侍るには、こ

今は果して。ん。

御館の人やどりに…をるを見て

の方の御問、免させ給へ。」とて、額を板敷に擦りつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、「口とく、心賢しき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今は果してん。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まれびとは酒飲まざるべし。鹿、猿の中に立交りて歌詠めと言ふとも、詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。あかず飲み、ものきたなげに食散らす人々は暖かにこそ。風冷やかなるに、この火取りて法師にまゐらせよ。」とて、白銀をもて作りたる猫の形したるを取傳へて、「君より賜はる。」とて、前に置きたり。「鹿、猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ痩法師が爲には、げに似つかはしき御賜ぞ。」とて、三たび押戴きぬ。翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに誰人の童ならん、くゝり袴の裾朝露にぬれそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせん。火埋みして手足を暖めよ。」とて、かのきら〳〵しきものを與へて、顧みもせで立去りぬ。

拾ひやしつる

あなづらはしく幼げなるもの

童うち驚き、「これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬもの賜ひつるは。」とて青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰かは得させん。拾ひやしつる。」と言ふ。「さらに、〳〵。道のそらにかゝるものやはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。」と言ふ。やがて御館にもて參り、仕ふる君を呼びいでて、しか〳〵の事なんと申す。いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけん、いぶかし。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うち笑み給ひ、「かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、我が門の前に棄てゆきつるよ。」

銀の猫　（狩野探冥筆）

口に蜜あれど心には針のおはすらん

うちひそみぬべし

同じき十九日（平治元年（一一五九年）十二月十九日）

光頼　藤原顕頼の子。權大納言正二位に進み、桂大納言と言つた。承安三年（一八三年）歿、年五十。

信頼　藤原信頼。光頼の朋。平治の亂に敗れて清盛に斬られた、年二十七。

たび似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ」とて、取りおろさせ給ひぬ。

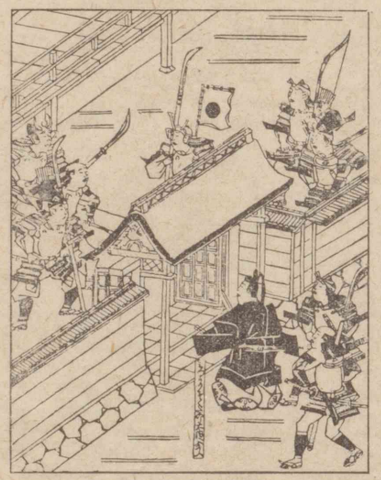
西行後にこの事を人に語りて言ふ、「右府はまことにねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふ事を生れ得給ひけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔のこの後やう〳〵衰へさせ給はん世の姿なるは」とて、涙とゞめがたくして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うちひそみぬべし。

（藤簍冊子）

一八　光頼卿の參内

さる程に内裏には、同じき十九日公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の擧動過分なりとて、不參にて

おはしましけるが、參内して承らんとて、殊に鮮かに束帶引きつくろひ、蒔繪の細太刀をおとなしやかに佩き給ひ、傳子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雜色の裝束にいでたゝせ、「自然の事もあらば人手に懸くな。汝が手に懸けて光頼が首をば急ぎ取れ」とて、御身近く置き、そのほか清げなる雜色四五人召具して、大軍、陣を張りて、所々門々を固く守護しけるを事とも（古版本）せず、先高らかに追はせて入り給へば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。



光頼卿參内

大軍……固く守護しけるを事とも（古版本）せず

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上萬たち皆下にぞ著かれたる。光頼卿「こは不思議の事かな。人

長方　藤原顯長の子。從二位權中納言となつた。

召に　參ぜざらんば　者を　死罪に　行はるべし　と　やらん

はいかにふるまふとも、彼は右衛門督、我は左衛門督なれば、下には著くまじきものを」と思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ」と色代して、しづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられけり。右の袖の上にゐ懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の裾引直し、衣紋つくろひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば、死罪に行はるべしとやらん承りて參内するところなり。抑何事の御諚ぞ」と問ひけれども、信頼卿ものも宣はず、著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議のさたもなし。程經て光頼卿つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

聞仕し　給ひつれども。

あはれ　この　人を　大將として　合戰せば　いかばかりか　頼もしからん

信頼　と　附き　給ふ。

惟方　藤原惟方。檢非違使別當。

庭上に充ち滿ちたる兵どもこれを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人一人もおはしまさゞりつるに、し出したる事よ。門を入り給ふより、聊かも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりか頼もしからん」と申せば、傍なる者の「昔頼光、頼信とて源氏の名將おはしましき。その頼光をうち返して光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし」と言へば、また傍より「なぞ、その頼信をうち返して信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ」と言へば、「壁に耳、天に口といふ事あり。怖し、〳〵。聞かじ」と言ひながら、皆忍笑に笑ひけり。

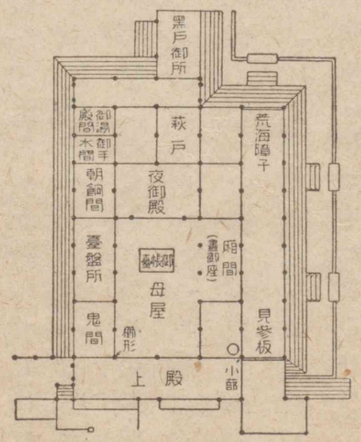
光頼卿かやうにふるまひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小じとみの前、見參の板高らかに踏鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしけるを招き寄

傳へ承る如きは

少納言入道
藤原通憲入道信西。

神樂岡
今の京都市左京區吉田山。

せ、宣ひけるは、「公卿僉議とても催されつる間參じたれども、承り定めたる事もなし。まことやらん、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人どもなり。その中に入らん事甚だ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれける事はいかに。以てのほか然るべからざる擧動かな。近衛大將、檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職にゐながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」と宣へば、別當「それは天氣にて候ひしかば。」とて赤面せられけり。



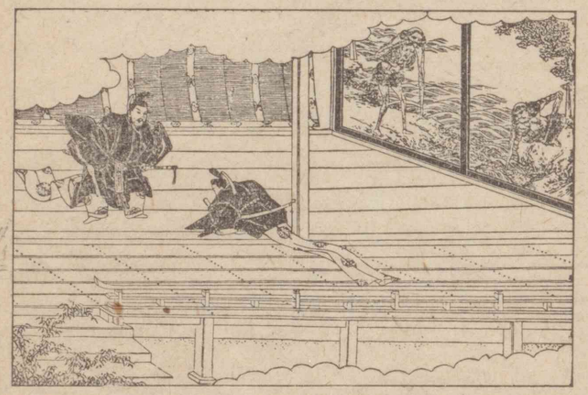
清涼殿圖

勸修寺内大臣
勸修寺内大臣高藤。

三條右大臣
三條右大臣定方。高藤の子。

當家は……與せざりし故に……さしもどかゝる程の事はなかりしに

光頼卿重ねて、「こはいかに敕諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さゞるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣が延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ德政なり、一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なつて、讒佞のやからに與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝ程の事はなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はん事、口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳



光頼卿惟方を戒む（保元平治闘圖會）

火などを懸けなば　灰燼の地となりたらんだにも朝家の御歎なるべし

主上　第七十八代二條天皇。上皇　後白河天皇。

朝餉の方に人音のし櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ

上るなるが、和泉、紀伊國、伊賀、伊勢の家人等待受けて、大勢にてあなり。信頼卿が語らふところの兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めんには、時刻をや廻らすべき。若しまた火などを懸けなば、君もいかでか安穩にわたらせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかに況や君臣共に自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべきをや。右衛門督は御邊に大小事を申し合すとこそ聞ゆれ。相構へて〳〵隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主上はいづこにおはしますぞ。「黒戸の御所に。上皇は。一本御書所に。内侍所は。溫明殿に。劍璽はいづこに。夜の御殿に。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。

また「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衛門督住み候へば、その方ざまの女房などぞか

かくどざんなれ

かやうの例ありと雖も

洗ひぬべくこそ侍れ

げろひ候らん。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくどざんなれ。主上のわたらせ給ふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷しまゐらせたり。末代なれども、さすがに日月は未だ地に落ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をいかに守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝には未だかくの如き先蹤を聞かず、前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚るところなく口說き給へば、惟方は人もや聞くらんと、よにすさまじげにて立たれたれども、且は悲しくて、我いかなる宿業によつて、かゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有樣を見聞かんやからは、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて袍の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、うち萎れてぞ出で給ひける。

（平治物語）

亘理章三郎　東京高等師範學校教授。倫理學者。明治六年兵庫縣に生れた。

勵まさうとする

一九　永遠の生命

亘理章三郎

個人の生命には限りがある。永遠を求め無窮に憧れても限られた生命はいかんともしがたい。生きた者の惱みはそこに發生するのである。そこで何所かへ永遠の生命を見出したいといふ所から、宗教は次の世に天國とか、極樂とか、乃至は淨土といふやうな世界を假定し、其所に永遠の生命があるとして人間を導き、且勵まさうとする。然るに我が日本精神は、その永遠の生命をさうした無可有鄕に求めないで、現實なる日本の國そのものに見出してゐるのである。我等日本民族はこの國を愛する事によつて、この國に永遠に生きるのである。この五尺の身體は數十年を待たずして死んでも、この國を愛する一念によつて、この國に永遠の生命を創造する、これが日本精神に他ならぬのである。

若林強齋　江戸時代中期の儒者、神學者。淺見絅齋の門人。京都の人。享保十七年（一三九二年）歿、年五十四。

たとひ衰へても　斃れても

故に我等は代々、我等の祖先の魂はこの國と共に永遠に生きつつあり、永遠にこの國を護つてゐると信じて來た。江戸中期の學者若林強齋は、大和魂の立志といふことを述べて、よくその點を明らかにした。卽ち彼は、志を立てるのはこの五尺の身體の生きてゐる間だけではない。この身體はたとひ衰へても斃れても、天の神より下し賜はる御玉―靈魂をどこまでも忠孝の御玉と守り立て、天の神に復命して八百萬の神の下座に列り、國家を鎭むる靈神となるに至るまで、ずんと立て通すことである。」といつてゐる。我が日本の國民は誰でも、赤誠を以て國の爲に力を盡すならば、その淸らかな精神は神そのものとなつて、永遠の生命を續ける事が出來ると明らかに敎へてゐるのである。

維新前にあたつて若き日本の士氣を鼓舞作興した藤田東湖、あの東湖の有名な回天詩の一節に「苟も大義を明らかにして人心を

正しうせば、皇道爰んぞ興起せざるを憂へん。この心奮發神明に誓ふ。古人言ふあり斃れて後已む」といふのがある。苟も大義名分を明らかにして曲つてゐる人間の心を正しうしたなら、皇道が何で興起せぬ事があらう。自分は發奮一番、神明に誓つて人心を正すつもりである。息の根の通ふ限りあくまでその事にあたる。それで遂に斃れたら、古人のいふ通り萬事已むのだといふ雄々しい志を述べたものである。

苟も……正しうしたなら

然してその翌年に出來た彼の正氣の歌は、劈頭日本の地理を詠んで、粹然として神洲に鍾る正氣卽ち大和魂が、いかにりつぱな國史を作り來つたかを讃へ、次で永遠に死なぬ日本精神の活動に言ひ及び「乃ち知る、人亡しと雖も英靈未だ曾て泯びず、長へに天地の間に在りて隱然彝倫を敍する」と續けて、忠臣義士の精神力は決して肉體と共に亡びるものでない事を說き、さて末尾に至つて自分の覺悟を述べて、

「生きては當に君寃を雪ぎ、復皇維の張るを見るべし。死しては忠義の魂となり、極天皇基を護らん」といつてゐる。これは自分の生きてゐる間は主君烈公、齊昭の寃を雪いで、道德をこの世に明らかにするが、死んだら忠義の靈魂となつて、天地のあらん限り永遠に皇基を守り奉らうといふのである。

これは……守り奉らうといふのである

前年の回天詩では、生きてゐる中はやるが、死んだらば萬事已むのだといつてゐたが、今や生きてゐるうちは勿論死後と雖も活動は休止せぬといふ考に進んだのである。

元來「死して後已む」といふ言葉は、支那の論語にあるのだが、幼少からこの書を精神の糧としてゐた彼は多分にその感化を受けて、それを箴言としてゐた。然るにその後、だん〳〵我が國史の精神に深く入つて、幾多忠臣義士の研究を進めると「死して後已む」などと

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも
とゞめおかまし大和魂

いふ所には留つてゐられず、茲に天地の有らん限り皇基を護るといふ日本精神の體現者となつたのである。

吉田松陰もまたさうであつた。かの有名な士規七則には「死して後已むの四字、言簡にして義廣し。堅忍果決確固拔くべからざる者は、これを捨てて術なし」。卽ち死して後已むといふことこそ男兒が覺悟を定める唯一無二の方法だとしたのである。然るにその翌年になると楠公七生の說を作つて、楠公兄弟は七度生れ變つたどころではない。永遠に不死なのだといひ、此所に明らかに日本精神の永遠の生命に悟入したのである。その絕筆の留魂錄には、雄々しくも、

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも
とゞめおかまし大和魂

と詠じてゐる。

姉崎正治　宗教哲學者。文學博士。東京帝國大學名譽教授。明治六年東京市に生れた。

スコットランド　英國本島の西北部地方。

東湖、松陰の兩英傑が支那精神の粹から一轉して、日本精神の粹を自覺するに至つたといふ事は、いかにも意義深い事といふべきである。この兩英傑の覺悟自覺こそ實に日本精神が、皇國に永遠の生命を見出すといふ最もよき例證であると思ふ。まことにこの皇國を愛し、永遠の生命を創造して行つてこそ、始めて我々はほんたうの日本人になり得るのだと言ふ事が出來るのである。

二〇　國土と愛國心

姉崎正治

天然の美に富む事に於て、世界のうちに日本と肩を比べ得る國が、果してどれだけあるだらうか。平和な南ドイツの山林、豪宕なスウィスの山嶽、幽邃なスコットランドの湖水、繪にも描かれ、詩にも歌はれた世界の美國は決して少くないが、これ等諸種の美を包有して、これに添飾するに蒼海碧空を以てし、眞に天惠の美を恣にしてゐ

錫蘭島　インド半島の尖端に近く位する。イギリスの直轄植民地。

國土を愛する國土の美を愛する精神

るのは、獨り我が日本の國土あるのみである。若し錫蘭島に印度洋上の小天國といふ名を許すならば、日本は確かに太平洋上の一大公園である。日本人自身がその國土の美を誇り、外人もこの國を世界の遊園と見るのは、決して偶然でない。

思ふに、日本人が愛國心に富んでゐる事には、いろ〳〵の原因が複合してゐるには違ひないが、その原因の一つ、また主なる一つは、その國土を愛する、國土の美を愛する精神にあらうと思ふ。日本人が海外に移住しても、どうも故郷を慕ふ念が強くて、外に永住が出來ないといふのも、恐らくはこれが爲であらう。また自分等の外國にゐた時の經驗に徴してみても、懷郷の念には、常に美しい山水の故國をしのぶ情が、その強きを占めてゐた。

これは必ずしも日本人ばかりでなく、一體人間の愛國心は、愛郷心と密接に關聯し、而して愛郷心は幼時の聯想と共に、どうしても

愛國心もまた第一に故郷としての國土を愛する情から起る

その國土天然の美と離れにくいのである。北ドイツやロシヤのやうな平坦廣漠の土地でさへ、その住民の愛郷心は、その土地の天然を離れないのを見れば、スウィスや日本のやうな秀麗な國の住民には、特にその故郷を懷ふの情が強く、その愛郷心がまた愛國心となるのは至當である。謂はゞ、一つの國民にとつて、その國土は人の身體のやうなものである。誰も自分といふ考のうちには、まづ直接に身體の事を考へ、自愛の心はまづ第一に身體に對して發するが如く、愛國心もまた第一に故郷としての國土を愛する情から起る。それから、自分の身體を愛する事は同じでも、美しい身體の人は、どうしても畸形の人よりもその身體を強く愛し、多くそれに就いて配慮する。日本國民は莊麗な身體を受けて生れた壯者のやうなもので、日本人の愛國心が國土に關係の深い事は、看過してはならぬ事實である。

阿倍仲麿　元正天皇の養老元年（一三七八年）入唐し、名を朝衡と改め唐朝に仕へた。後歸國の途に就いたが安南に漂著し唐に留り、寶龜元年（一四三〇年）その地に歿した、年七十。

高師の濱　大阪府泉北郡高石町海濱の總稱。

勿來の關　中古常陸から陸奥に通ずる街道にあつた關。址は磐島縣石城郡勿來町にある。

國土と愛國心と密接なのは、國土山川の美といふ事ばかりでなく、一國國民の祖先から承繼いで來てゐる精神の發表、卽ち文學と國土とが密著してゐる事からも生ずる。阿倍仲麿が支那の海岸で海上に出た月を眺めて、懷鄕の情に堪へず、あの月は故鄕では恰も三笠山頂に出た月だらうと詠じた。その場合には仲麿の懷鄕の念と三笠山といふだけの關係であつたが、一旦「三笠の山に出でし月かも」といふ和歌になると、それが國民文學となり、更に國土と密著して、愛國心の一部となるのである。筑紫潟、須磨の浦、吉野山、高師の濱、和歌の浦、勿來の關など、名だけ聞いても、日本人には何となしにゆかしい感情が起る。ましてその土地に行けば、その風光の美を賞するばかりでなく、この美なる山河は、我等が祖先以來、詩に歌に詠じて歎美し來つた山川であるとの感を生ずるからして、その風景に、單に一時的でない興味をもつやうになる。その風景山川に對し

歌人はゐながらにして名所を知る

ハイネ　ドイツの詩人。（西紀一七九七—一八五六年）

ライン　スウィスのアルプス山中に發し、ドイツの西南部を流れオランダに入つて北海に注ぐ。

スコット　イギリスの詩人、小說家。（西紀一七七一—一八三二年）

湖畔詩人　イギリスのカンバーランドの湖水地方に住んでゐた一團の詩人。ワーズワース、サウジ、コールリッジ等を中心とした。

て、祖先の精神を呼吸する國土と文學とが一つになつて、精神に三世に亙つた深い印象を與へ、愛鄕心、愛國心に永遠の意味を與へるのである。

それであるから、俗にも「歌人はゐながらにして名所を知る」とも言ひ、また古へから歌人は歌枕と言つて、歌に詠ぜられた名所、舊蹟、山川を巡遊する事もしたのである。而してその文學を愛する情と、山川天然に對する感情とが合體して來る。江戸時代に、八犬傳の名所巡りが行はれたのも、決して無理でない。ハイネの詩がドイツの國境をライン河まで延したといふのも、スコットや湖畔詩人が、その山川を國民の心の中に入れたといふのも、皆同じ事である。一國の文學はその國民精神の精華で、隨つて國民の精神的團結力の根源である。而して文學と國土山川とが相合して、人に自分の國といふ觀念を與へる力の強い事を思へば、一國の土地山川と愛國心との

離れがたい事も、おのづから明らかであらうし、その祖先以來の文學にも歌はれてゐる山水が、新文明の爲に破壞されて、全く舊時の面影を止めないといふやうになれば、それは國民文學の大損害で、また愛國心の一部分を毀損する事になるのも明らかであらう。

自分の國でなくとも、他の國でもこれを愛するといふ事は人の自然の性情で、永くフランスにゐた人は、ドイツよりもフランスを愛する。或はまたまだ見ないでも、繪畫や詩歌からしてかの國よりもこの國が慕はしいといふやうな事は甚だ多い。この種類の敬愛或は思慕の情は愛國心とは稱し得まいが、とにかく、この種類の愛情の存在するのは事實で、而してこの愛情は、多くの場合では、人事よりも天然の方が直接に心情に訴へる力になつてゐる。例へば、スコットの「湖上の美人」を讀んで、スコットランドの山水を慕はない人はなからう。シルレルの「ウィルヘルム・テル」を見れば、スウィスの氣象、民風

ゐた人は…フランスを愛する

湖上の美人　全六篇。スコットランドの景勝カトリン湖を背景とした敍事詩。

シルレル　ドイツの詩人、劇作家。（西紀一七五九―一八〇五年）

ウィルヘルム・テル　戯曲の名。

と共に慕はしく感ぜられるのは、アルプスの山嶽、四森州湖上の空氣であらう。ドイツ人でなくとも、ハイネの詩を吟ずればラインの河が何となく慕はしく、日本人でも洞庭とか赤壁とかいふ聯想で、心を南支長江の邊に遊ばしめる。このやうな關係からして、一つの國が多くの外國人にも愛せられ、また外來の客を招致する事は著しい事實で、ゲーテがイタリーを詠じた「その國を知るや」の歌が幾何のドイツ人をして、柑子が黃金色をなしてオリーブの木と隣り、石柱の家が碧空碧水の間に點々してゐるイタリーの國土を思はしめ、隨つて、幾何の人をイタリーに引附けたか。これ等は一國の天然がいかに驚くべき引力を持つてをるかを證するものである。

されば國土の美、天然の美は、一國民の團結の上から言つても、外國人をしてその國に對する同情を惹起させる點から見ても、一國の生存繁榮の上に大きな關係を有してゐる事は明らかである。日

四森州湖　ルツェルン湖のこと。

ゲーテ　ドイツの文學者。（西紀一七四九―一八三二年）

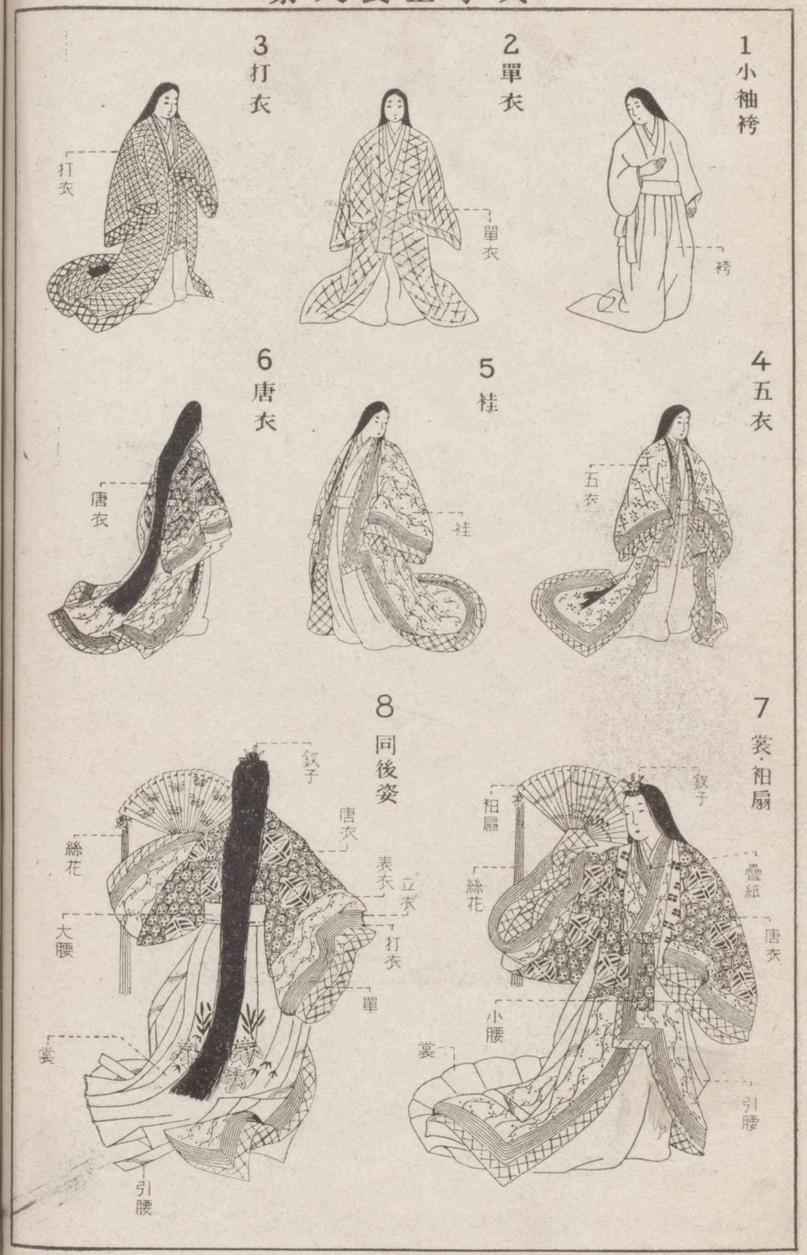
國土の美天然の美は…關係を有してゐる

第次用着帶束

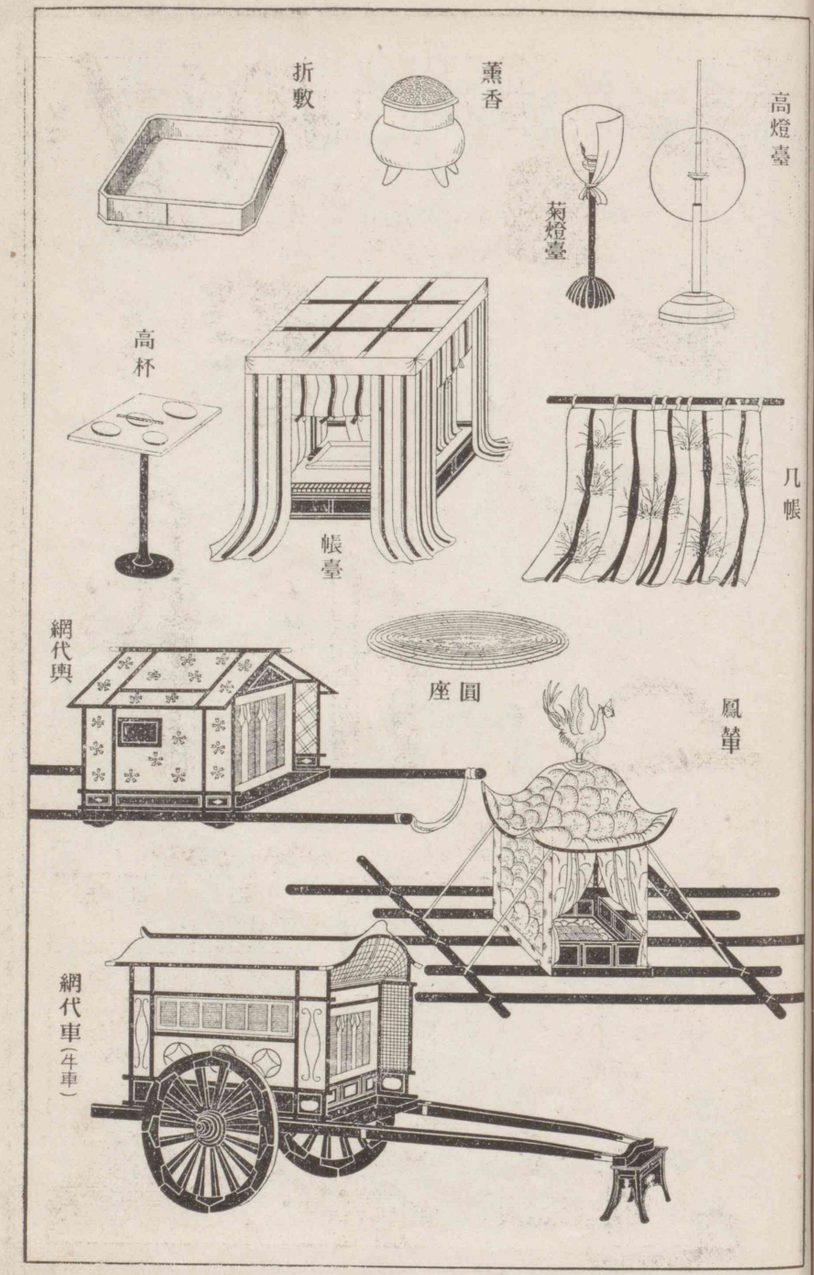
本の秀麗な山川は直接にその住民の幸福たるのみならず、また團結や同情の上にも大なる力を有してをると言はなければならぬ。

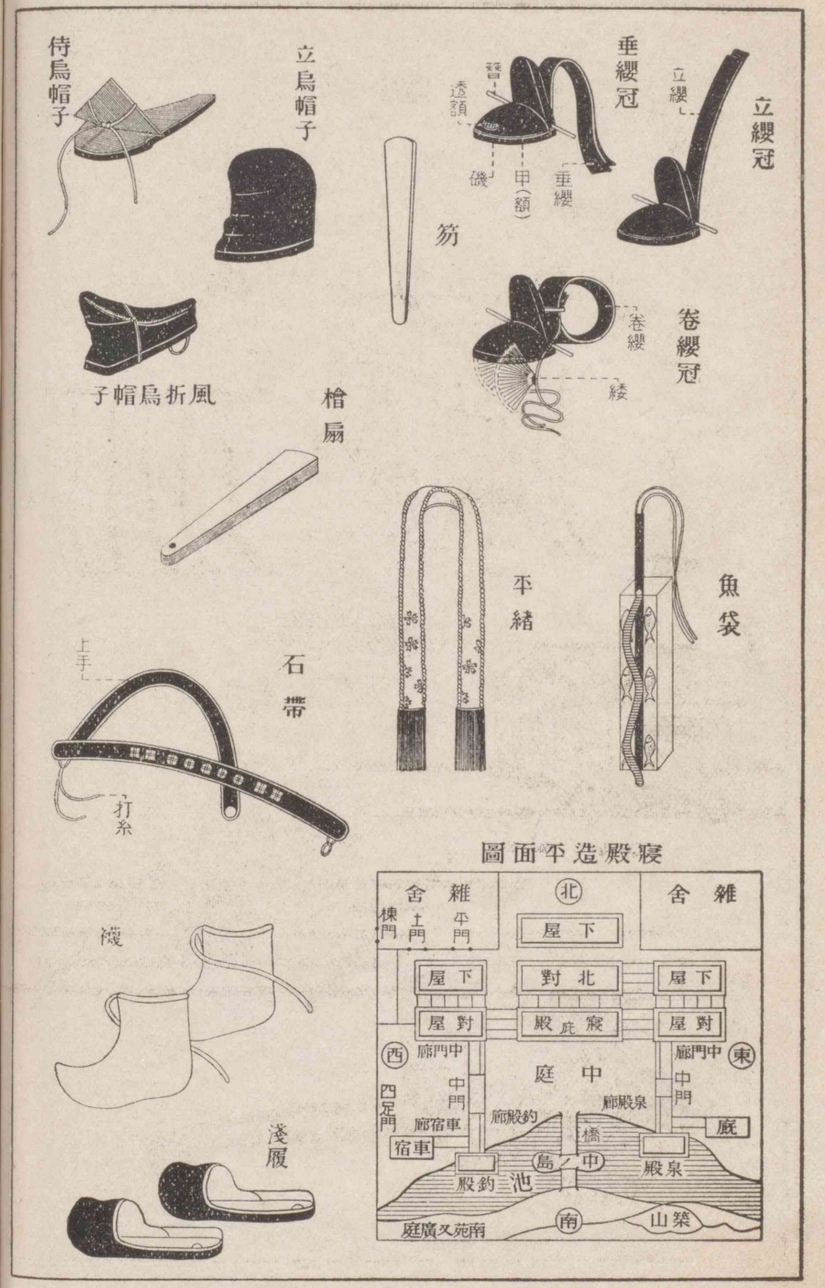
女子新國文 改制新版 卷九 終

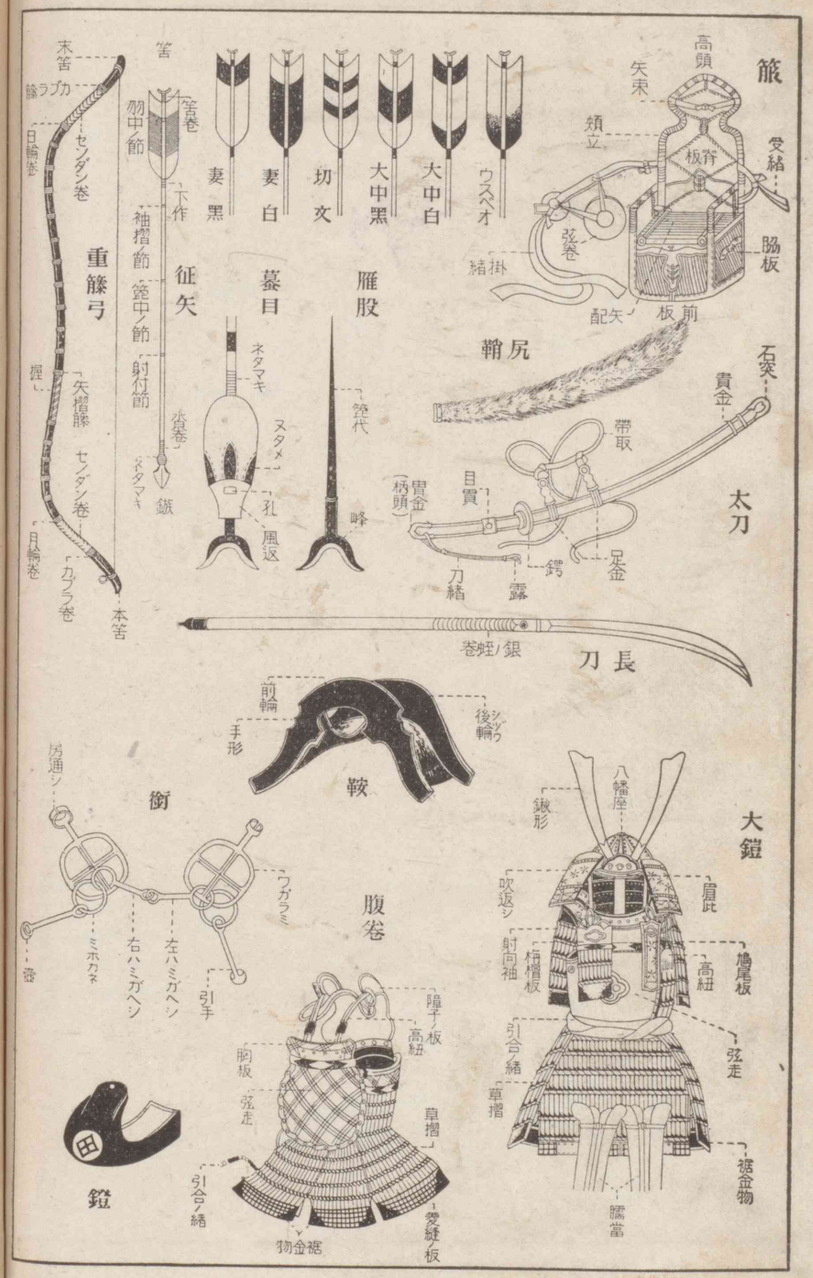
女子正装次第


1 小袖袴
袴
2 單衣
單衣
3 打衣
打衣
4 五衣
五衣
5 袿
袿
6 唐衣
唐衣
7 裳・袒扇
釵子
袒扇
疊紙
絲花
唐衣
小腰
裳
引腰
8 同後姿
釵子
唐衣
絲花
表衣
立衣
打衣
大腰
單
裳
引腰

直衣
直垂
風折烏帽子
懸緒
白小袖
小サ刀
蝙蝠
立烏帽子
直衣
單衣
蝙蝠
腰帶
奴袴（指貫）
肩衣半袴
肩衣
内衣
力
扇
半袴
大紋
鬚斗目
胸紐
蝙蝠
狩衣
狩衣
アテ腰
蝙蝠
白無垢
袖括
奴袴（指貫）
狩装束・行縢
狩衣
射籠手
空穗
太刀
行縢
奴袴（指貫）
物射沓
水干
大元結
モモ眉
水干
力
菊綴


折敷
薫香
高燈臺
菊燈臺
高杯
帳臺
几帳
網代輿
圓座
鳳輦
網代車（牛車）


侍烏帽子
立烏帽子
垂纓冠
立纓冠
笏
卷纓冠
風折烏帽子
槍扇
平緒
魚袋
石帶
打糸
襪
淺履
寢殿造平面圖
北
舍雜
舍雜
屋下
屋下
屋下
北對
寢殿
屋對
屋對
西
東
廊門中
廊門中
庭中
中門
四足門
廊宿車
宿車
廊殿釣
廊殿泉
橋
島
池
殿釣
殿泉
庭
南
庭廣又苑南
山築



昭和七年十二月十日印刷
昭和七年十二月十五日發行
昭和十年二月二十日再版發行
昭和十年十二月二十五日訂正三版發行
昭和十一年十二月十八日訂正四版發行
昭和十二年十二月二十五日訂正五版發行
昭和十二年十二月二十四日訂正六版發行

女子新國文改制新版

定價 九卷 金五拾八錢

著作 芳賀矢一

所有 橋本進吉

編者 芳賀矢一

訂補者 橋本進吉

東京市神田區神保町一丁目三番地

發行者 合資會社 冨山房

同所冨山房社長

代表者 坂本嘉治馬

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 合資會社 冨山房

（明治二十九年六月設立）

東京市神田區神保町一丁目三番地

電話神田代表二、一七一—二、一六六番

振替口座東京五〇一一番